



教職大学院

Newsletter

No.189

福井大学大学院 福井大学・岐阜聖徳学園大学・富山国際大学連合教職開発研究科 since2008.4 2025.01.19(公開版)

東京サテライトの協働探究「教職の総合的な学習の時間」は、まだまだ続くよ、どこまでも

福井大学大学院連合教職開発研究科 特命教授(東京サテライト事務副所長)

福島 昌子

1. 開校五年目を迎えて

早いもので東京サテライトが開校し五年目の節目を迎えました。開校初年度が新型コロナウイルスの感染が拡大し始めた頃で、連合教職大学院でも開講式が初のZoomオンラインで開催されたときでした。その時のサテライトの入学生は東京、神奈川、新潟、富山の幼小中高校の国公立の6名の先生方で、同4月に着任したばかりのわたくしとで、7名で大塚にある事務所のコミュニティ・ラウンジで開講式を行いました。それが五年目にして在籍した院生が39名になり、東京を拠点とするコーディネーター3名、専任教員がわたくしを含め3名(東京在中1名、福井在中東京担当2名)の6名になりました。

福井大学でも組織的なサテライト事務所は初めてであり、連合教職大学院にとっても教師教育支援組織の初の分校でもあります。当時、わたくしが考えた東京に設立する目的は、福井大学がおこなってきた「拠点校方式の教師の学び」を東京4,224校(基幹統計R6年調査による)や関東の国公立の幼少中高の先生方および全国の教育機関や教育関係者に向けて発信し、教師の新たな支援組織を展開することになりました。また、東京は多くの情報が集まり交通の利便性にも長けているため、関東以外の先生方も学

びの拠点としやすい環境にあると考えました。そういった意味では、東京サテライトは地域を越えた教職の協働・探究の追求ができる可能性を秘めた拠点といえます。

2. 東京サテライトの特殊性と特色

東京サテライトは、あくまでも福井大学連合教職大学院に添う存在ではありますが、福井とは様々な異なる特殊性が存在し、またオリジナルな特色をもたせています。

まず、特殊な環境として所属院生の地域の多様がいえます。2021年度に福井大学教職大学院が宮古島教育委員会と連携協定を結んだことにより、一期生の東京、神奈川、新潟、富山に加え、二期生から沖縄の離島(宮古島、多良間島)が加わり、そして、千葉、埼玉、長野、沖縄本島と展開していきました。

院生の所属機関も国公立の幼小中高校、専門学校、教育行政機関が揃い、本年度は在籍院生の四分の

内容

巻頭言	(1)
インターンシップ/週間カンファレンス報告	(4)
ミドルリーダー/マネジメントコースだより	(9)
合同カンファレンス 報告	(23)
お知らせ	(36)

三が校長、副校長、教頭、行政などの管理職の先生方です。このようにして福井から東京サテライトへの繋がり、そして東京サテライトという場所からさらに各地域の相対化が促進される大変恵まれた環境となり、視座と視野の広がりが見られるようになりました。しかし、その一方で関東には12の国立私立の教職大学院があるため、福井大学といってもほとんどの人たちに知られていない存在であり、関心をもってもらえなかったというのが現状でした。したがって、草の根からのスタートとなり、わたくしが東京出身ということもあり、まずは自分のネットワークから院生をつなぎ、次第に東京都教育委員会、東京都私学協会、埼玉県行政へと広げ、東京サテライトを拡充していきました。その中で、多くの方が関心をもたれたことは多様な地域から集まる院生たちが学んでいることでした。それは同質性の学びと共に異質性の多様な学びが得られるからです。学校教育は、その地域の文化や歴史、思想を受け、その地域に支えられ学校の独自性がより発揮されることが多く、その側面においては東京サテライトに入学すれば、多様な情報やリソースが得られることの魅力は大きいといえます。

もう一つは東京サテライトというよりも福井大学の魅力である拠点校方式の学修システムといえます。福井の教員にとって当たり前である学校を休まずとしても通える教職大学院は、福井県外の教員にとっては誰もが目を見張るものがあります。多くの教職大学院は通常勤務日においても大学院の授業や研修等が設けられていますが、本大学院は勤務校での日常の中で課題を解決することを目指すため、平日に勤務から離れてそれらに参加するような形はありません。これは現職教員として大変ありがたい課程であり、そのような希有な環境を東京で享受できることを可能にした場所が、東京サテライトなのです。このシステムは誰もが魅力と述べます。

また、開校初年度から東京サテライトならではの特色をもたせました。それは、院生とスタッフ教員との協働の企画運営によるラウンドテーブルを開催することです。このねらいは院生の力量アップ、各々の

教員としてのネットワーク（人脈）の拡大、そして教職大学院で培った実践力を勤務校で速戦的に活かすことを意図としました。2020年度は「ICTで探究と協働はどう育まれるのか」、2021年度は「社会とつながる教育・学校」、そして2022年度は「子どもたちのWell-beingを生み出す教師の探究—つながる教育—」と“つながる”ことを考えるテーマを続け、そして現在に至っています。この実践により、各勤務校における「教員と生徒との関係」「管理職と教職員との関係」「中堅職員と若手職員との関係」の相似形が「東京サテライト内の関係性」から作られるという点に着目し、院生同士は対等であり平等であったとしても院生自身のマネジメント実践学習、そしてエージェンシーを育む機会となればと始めたものです。また、この東京サテライト・ラウンドテーブルと同様に宮古島市教育委員会との共催で、2021年度から宮古島ラウンドテーブルをこちらも東京と同様に院生とスタッフ教員の協働で企画運営し開催しました。現在では我々や宮古島の院生の手から離れ、宮古島市教育委員会主催、本連合教職大学院共催の行政義務研修に位置付けられ、宮古島の離島でも対話を重視したラウンドテーブルが自走し始めています。

また、宮古島ラウンドテーブルと同年から島内で東京サテライト独自のDEAL (Deep Active Learning) 教員研修を開催し、今年で第4回になりました。この研修は、わたくしが中心に企画運営を行ってききましたが、最近では修了生も参画し東京サテライトから発した実践コミュニティとしての機能を発揮し始めています。こちらの教員研修も東京サテライト・ラウンドテーブルと同様にNITS（独立行政法人教職員支援機構）のコラボ研修プログラム支援事業に採択され、島内外の全国の教育関係者が集い、フィールドワークの協働探究演習とラウンドテーブルを組み合わせた形で開催をしています。このように東京サテライトでは、東京と宮古島の二か所で教員研修、ラウンドテーブルを開催していますが、東京で開催するのと沖縄離島の宮古島で開催するのとでは、全国からの参加者による多様性は同じであったとしても開催地が異なることで、参加者のものの見方考え方も異なるため、新たに得られる気づきも多く、当たり前

とんでいたことの見え方が変わることが自覚できる研修であると主催者ながら感じています。したがって、東京サテライトがこの二つの拠点において教員研修を行う意味は大きく、それも東京サテライトの特色であり、魅力の一つでもあると考えています。

3. 振り返っての学び、「協働」の難しさ

この五年間は過ぎてしまえば、あっという間の時間でしたが、振り返るとある意味で長かった五年間ともいえます。なかでも印象深く自身に残ったことは、東京サテライトの運営、拡充、全てにおいて、人と人、人と組織、そして組織と組織との「協働」なくして考えられないということです。現在、東京サテライトが比較的短期間で拡充されたのは、福井のスタッフ教員はもちろんのことサテライトを支えてくださる方々のネットワークが広がっただけでなく、その関係が確かなものになったからとわたくしは考えています。わたくし自身が大切にしてきたものは、「つなぐ」丁寧さ、そして何よりも相手、他者を大切にすること。それが軸にないことには協働は成り立たないと考えているからです。しかしながら、協働という「ことば」そのものが独り歩きしていることがあり、反省することが多々ありました。そもそも「きょうどう」には、「共同」「協同」「協働」があり、それぞれに意味や在り方が異なります。最近では人との対話の中で学校教育のみならず一般社会でも「きょうどう」という言葉が共通言語として当たり前のように使われていますが、人によって「共同」であったり、「協同」「協働」と認識が異なっていたり、ややもすれば「きょうどう」にいくつかのパターンがあることを認識していない先生方もいらっしゃるようです。例えば互恵的にお互いが学び語り合いながら、立場を超えて一人一人が自身の持ち得る能力を最大限に発揮しながら共に作り上げていく意味をもつ「協働」に対し、一人一人に役割が与えられ各自が成すべきことを分担し、最終的に個人の分担した成果を持ち寄り一つに合わせるものが「協働」と思っている人もいます。そのため、共通の言語を使いながらも既に解釈が異なり、そもそもが違うわけです。「協働」には横、縦の関係の受容だけでなく、斜めの関係もあると

いうことです。組織は結局は人がつくっているわけですし、人とのかかわりから様々なことが構築されていくわけです。ITCやAIの時代であるからこそ協働が大切といわれることはもちろんのこと、そうだとするとそれ以前にお互いの対話があつてはじめて協働が成り立つものとわたくしは考えています。これは協働に限ったことではなく、かかわる関係双方の全てに存在し、ことばの意味を知識として正しくもつことも大切ですが、ことばの解釈の共有をすることが重要であると東京サテライトの企画・運営を担ってきた者として反省しつつ最も多くこのことを学んだ五年間でした。

このように福井による学びに加えて、東京という環境の齎す学びがここにはあります。特殊、特色というよりも個性的な学びとして、その学びを福井との互恵の関係の中で考え広げていくことができると、それに伴って福井大学教職大学院の学びが東京サテライトを介して、さらに全国へ広がるのではないかと期待しているところです。

最後に、五年目の節目ということもあり、巻頭言のタイトルにしましたが、わたくしのNL執筆定番としていつも述べている言葉で締めくくりたいと思います。東京サテライトの協働探究「教職の総合的な学習の時間」は、まだまだ続くよ、どこまでも。

多くの皆さまとかかわりながら教職を探究し学べることを大変ありがたく思います。感謝いたします。



東京サテライト RT の風景



インターンシップ・週間カンファレンス報告

考えの変容

授業研究・教職専門性開発コース1年/岐阜聖徳学園大学附属小学校 干場 千尋

大学院に進学し、インターンシップ生として活動し始めてから半年以上が経ち、この生活にもだいぶ慣れてきた。入学してからの間、自分のインターン生としての振る舞いや学び方が分からず、自分なりに模索してきた。現在は、貴重な2年間という時間を有効活用するために、インターンシップ先の先生方の授業や子どもたちとの関わり方を学んだり、カンファレンスの際には、他のインターン生や先生方のお話を聞き、様々なことを学んだりしている。

インターンシップでは、4週間であった教育実習とは異なり、年単位で学校現場をみることができ、子どもたちの変化や、学校の年間での動きを感じることができている。教育実習の際には、「困っている児童に支援しなくちゃいけない」「なんでもやってあげなきゃいけない」と思い込みすぎていたため、授業であったり、学級経営であったりに目を向けることができていなかった。しかし、現在のインターンシップでは、教育実習の時より俯瞰してみるができている。そのため、一つの物事に対しての対処法だけではなく、広い視野で物事を考えることができていると感じる。

インターンシップでの経験から自分の考えが大きく変わった点がある。それは「子どもたちにどうなって欲しいかを考え、そこからどのような声かけをするのが適切であるか」を考えるようになったという点である。子どもたちと関わる中で、できないことがあった際に、子ども自身が弱音を吐いたり、諦めそうになったりする場面に遭遇することがある。そのような時に、以前は思わず「そうだよ、難しいよね」と寄り添うだけになってしまうことが多くあった。子どもたちも人間である以上、「できることとできな

いことがある、できないことを無理矢理やらせるのは可哀想なのは」と考えてしまい、そのような声かけをしていた。この考えが変わったきっかけは授業実践で先生から頂いたお言葉である。私が、授業をする際に、挙手している子だけを当てて授業を進めていた際に、「挙手していない子やわからないなと思っている子は置き去りになってしまうよ」とアドバイスを頂いた。自分は挙手していない子には大きく分けて2つの理由があると思っていた。問われていることがわからない子、何らかの理由で挙手・発言すること自体が嫌な子の2種類であると考えていた。そのため、そういった子どもたちに無理矢理あてたり発言させたりするのは可哀想なことであると考え、授業でも挙手している子を中心に進めていた。そんな自分にとって、先生のお言葉は目から鱗であったと同時に、自分がしていた授業は自分がやりたかったものとはかけ離れていたことにやっと気がついた。このような経験から、学校でのいろいろな場面において、「子どもたちにどうなって欲しいかを考え、そこからどのような声かけをするのが適切であるか」を考えることが必要であると考えようになり、このように考えるようになったことで、自分になりたい教師像に少しだけだが近づくことができたと感じる。

上記の経験から、今後自分は、「子どもたちを置き去りにしない」という点、自分の理想である「子どもたちが楽しいと思えるような」という点の2点を授業実践や普段の子どもたちと関わる中で取り入れていきたいと考えている。

週間カンファレンスは、自分のインターンシップでの出来事、考えたことを整理する良い機会となっ

ている。インターンシップで経験したことを整理したり、周りの仲間に伝えたりすることが、より自分自身を振り返り、一つ一つの経験を関連させることに繋がっている。また、同じインターン生や先生方とお話することで新たな視点を獲得することができてい

る。自分だけでは、同じ方向にばかり考えてしまうことも、様々な考えを持った仲間との考えの共有、様々な視点を持った先生方との視点の共有が今の自分にとって大事な時間となっている。

金カンを省みて

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井県立丸岡高等学校 黒瀬 玲凱

11月に入り、2年間の大学院生生活もいよいよ集大成に差し掛かっている。金曜カンファレンスでは、M2が用意した企画が終わりを迎え、それぞれの興味に基づいたグループ探究が始まった。せっかくの機会なので、ここまでの金曜カンファレンスの振り返りを行おうと思う。M1の時の受ける側としての金曜カンファレンスとM2の時の企画する側としての金曜カンファレンスは地続きであるが、そこから語るには紙数が足りないので、今回は、企画する側としての金曜カンファレンスについて記す。

私たちが用意した企画は、①今後どのような企画になったとしても必要になることについて考える。②「自分が教育で大事にしたいこと」を探す、あるいは解像度を上げるために、『学校って』について考える。③各々が興味関心を持つものについてグループ探究を行う。の3つのステップに分かれる。

これらの企画は春休みに始まった。まずはM2各々が「金カンで取り組みたいこと」についてあげ、「何のために金カンを行うのか」について意見を交わしながら、各々がどこに重点を置いているのか理解を深めていった。その過程で、各々が抱えている思いの方向性が違うことを確認し、一部の人の興味を中心に据えて進めるのではなく、それぞれの目的を平等に達成するために、昨年に引き続き③を行うことにした。それを行うためには、新しく入るM1にも「自分なりの興味を見つけてもらうこと」が必要になる。そこで、金カンの意義や、少なくとも当時の会議に出席していたM2の興味の方向性に通底する「学校」について様々な視点から考え、その過程で自

身の興味を見つける時間にしよう②が立ち上がった。しかし、春休みの会議は出席率に差が見られ、「出席していない会議で決まったことを自分事として運営できるのか？」という疑問から、これらの決定を金カンが始まる4月に遅らせることにした。そのため、②の準備期間を確保する必要があり、その間の企画として、①を行うことになった。

改めて企画の流れを書いてみると、それなりに筋が通っているように見えるが、あくまでこれは要約である。実際には、会議ごとに出席者が大きく入れ替わるため、前回会議の意図が次に持ち越されず、同じ議論を何度もし、前に進まないこともあった。

春休みのうちに①、②を構成する小企画の詳細まで詰められなかった私たちは、小企画の目的だけを全体で話し合い、それぞれの小企画の担当者がどのようにその目的を達成するかを考え、全体会議に起案するという手立てをとった。これは企画を同時並行で行うための策だったが、担当以外の企画について、自分事として運営できていなかったかもしれない。企画間のつながりが薄かったようにも思う。

他にも様々な問題が発生したが、全ての問題の根底には、「M2の総意」というものが一度も取れなかったことにあると思う。「なぜ金カンをやするのか」「なぜこの企画をやするのか」といった部分について、全体会議で決を取ってはいるものの、実行段階でズレが生じる。同じ言葉で違うことを話しているような感覚があり続けた。M2の人数が例年より多かったこと、それぞれのやりたいことの方向性に大きな差が

あったこと、参加度に差があったこと、小グループに分かれて運営を行ったこと、すべてが「M2の総意」を作る妨げであったようにも思う。

ここまでつらつらと書き連ねたが、これはあくまで黒瀬個人の見立てである。私の意見もまた、「M2の総意」ではない。むしろ、私だけが「M2の総意」からずれているだけで、実は他のメンバーの中では目的が合致していたのかもしれない。私の本当の反省すべき点は、そこをすり合わせられるだけの会話を他のM2と交わしていないことなのだろう。

個人的には反省だけの金カンだが、それは失敗であることを意味しない。各企画の振り返りやM1の話から、院生それぞれが各々の学びを得ていたことが分かる。③に入る際に書いたマインドマップから、各々の興味関心の解像度が上がったことが分かる。特にM1の成長は、私達の企画の最も喜ばしい成果である。

そもそも、20人弱が全く同じ方向を向いて進んでいくことなどほぼ不可能である。多くの集団は、達成すべき目標を外から与えられ、ズレはあってもそこだけは同じであるために、妥協のラインを決めやすいが、金カンはその達成すべき目標さえ、自分たちで決める必要がある。合意形成の達成はそもそもその達成ラインが人によって異なることも相まって非常に難しい課題である。今年のM1は早くもその課題にぶつかっているようである。私達の代は、その正解を示すことはできないが、そのための努力の過程を示すことはできる。私達の過程が次の代の糧になり、それを繰り返していくことで、福井大学連合教職大学院の院生集団がより良いものになっていくことを期待し、残り少なくなった金カンの運営を行っていく。

私にしかできないこと

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井県立高志高等学校

川嶋 海音

12月に入り、インターン先の高志高校では冬休みモードに入っている生徒もちらほら出てきた。こうして、高志高校にインターンに行きだして、1年9か月が経つ。

今年は1年生のとあるクラスに配属され、何回か授業をさせてもらった。空間図形分野では、実際に図形を見たり、手で感じたりしてもらうために、三角形や四角形のパーツを組み立てて生徒自身に正多面体をつくってもらった。高校に入ると数学で使うのは紙とペンのみであり、そうした活動を行うことが少なくなる。教室にそのパーツをもっていくと生徒たちは、「なにこれー！」などワクワクしている様子が見えた。高校生になっても、心は小学生のような純粋な気持ちがあることを改めて実感させられた。

ただ図形をつくるといっても、そう簡単にはいかない。うまく図形が作れない生徒もいて、どうしたら生徒が諦めずに試行錯誤して手を動かしてくれるか、どんなヒントを与えたらよいかなど私も考えながら生徒と接していた。また、問題をグループで協力して解くという活動も行った。普段の授業は問題を解くとき一人で真剣に解いている。一人で解くという力もちろん必要だが、クラスメイトが困っていたら助けたり、自分が分からなかったら他人に助けを求めたりすることも大切な力だと考えている。そこで、「グループ全員が分かるように助け合いながら問題を解いていくこと」を伝えて、グループ活動を行った。普段から話すことが多いメンバーのグループでは、活発なグループ活動が行われていたが、あまり話さ

ない男女のグループでは私が話すように促したとしてもなかなか話そうとはしなかった。もちろん日頃から活動を行っていないのもあるが、どうしたらグループで積極的に話しあいを行うことができるのだろうと考えたときに、話さなければいけない必然性をつくる必要があると感じた。

こうした授業で私が必ずするようにしているのは、振り返りである。振り返りは、面白かったこと、気になったこと、考えたことなどなんでも書いてよいと伝えている。この振り返りを書くようになったのは今年の教育実習がきっかけである。免許のない私は、福井大学教育学部附属義務教育学校の後期課程で教育実習を行った。数学の授業では、生徒のつぶやきから次の授業を考えていたため、生徒の考えを理解するにはつぶやきを書いてもらう必要があった。そこには生徒の本音や気づきがかかれていて、生徒のた

めの授業をするにはどうしたらよいのかということに気づかされるきっかけとなった。その経験をもとに、生徒が一生懸命書いてくれた振り返りに対しては私も同じくらいの分量で返すようにした。現役の先生ではなかなか生徒一人一人に対してコメントを残す時間をつくられないと思うが、私はインターン生であるため時間がある。そうして、生徒と全力で向き合うためにコメントするようになった。それを繰り返していくと、どんどん生徒の振り返りの量や質も上がっていき、「この場合はどうなるんですか？」など質問も多くなった。実際に生徒と話さなくとも、紙面上でコミュニケーションをとることで得られるものは多い。生徒と繋がれるものは、なんでも蔑ろにせず向き合うことで何か見えてくるものがこれからもあるかもしれない。そのために、この振り返りを続けていきたい。

今年の歩みを振り返る

授業研究・教職専門性開発コース3年/福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程

酒井 夏瑞

今年も残りわずかとなった。「3年間って本当に長い！！もう早く卒業したいわ…」と今年何度も院生に言っていたのに、もう残り3ヶ月になってしまった。いや！ダメだ！終わらないでくれ！と思っっているくらい、あっという間の一年だった。今年度は、2年間お世話になった明新小学校から、附属義務教育学校の前期課程にインターン先を変え、新しい環境で院生活最後のインターンシップを行なっている。

少し話は逸れるが、「新しい環境へ飛び込むこと」について考えたい。新しい環境と聞いて思い浮かぶのは、4月だ。思い返せば、私の人生の中で入学式は何度もあったが、毎回不安だったことを思い出す。特に、中学や高校の入学式は、知人がほとんどいなかった。周りには既にいくつかのグループができており、焦りも感じた。しかし、不安と同じくらい期待もあった。「どんな人がいるのかな」「どんなことを学べる

のかな」とワクワクした気持ちがある。そして実際にその環境に飛び込むと、新しい出会いがあり、今までにない経験をすることができる。昔に比べると新しい環境に飛び込む価値を感じるようになった。だからこそ、大学も院も進んで新しい環境に飛び込むことを選択できたのだと思う。

私は今年度、附属義務教育学校という新しい環境に飛び込むことを選択したのだが、いくつか理由があった。①同じ学校で3年間インターンシップをすることも十分魅力があるが、これから現場に出た時のために他の学校も見たいと思ったこと。②自分の同期がM2で卒業し、現場に出たこのタイミングで、私も新しい環境に飛び込むべきだと思ったこと。③そして、附属義務教育学校で授業や子どもの見取り力をより向上させたいと思ったこと。どの理由も「現場に出るまでの残り1年間をどう過ごすか」を

考えた結果である。飛び込むからには、沢山学びたい。という気持ちで今年度のインターンシップを行なっている。

まず、自分が見たいと思っていた①については、インターンシップを行なっている間にひしひしと感じることがあった。私は明新小学校を2年間見てきたため、明新小学校＝現在の福井の小学校と捉えていた。しかし、「附属」という比較対象ができたことで、「学校にはそれぞれ独自の文化があり、その環境で育つ子ども達にも特徴がある」という捉えが変わった。学校の規模や地域性、大切にされてきた行事や指導などはそれぞれの学校で違いがある。そのような特徴が、学校文化として見られることを知った。

②については、新しい環境に飛び込むべきだと思って決意したのは良いものの、環境に慣れるには時間がかかるものだと思う。今年のインターンも明新小学校と附属のギャップを感じ、最初は戸惑いを隠せなかった。しかし環境に慣れるまで、あまり時間がかからなかったように感じる。そのように振り返る理由がある。インターン生を受け入れてくれているような温かい印象を受けたからである。附属のある先生が「インターンがいてくれないと困る」とおっしゃってくださった時は、嬉しくて涙が出そうだった。インターン生は大変難しい立場にあると思っている。週に2、3回しか来ない、支援員でもなく教員でもない、「なんとも言えない立場」であるインターン生。金カンではこれまでインターン生という立場であることで生まれる悩みも多く聞いてきた。自分にも多くあった。このような立場だからこそ、受け入れてくださっているということは大変嬉しかった。

そして、③の見取りの力を向上させたいという思いについては、授業を見ていく中で大きくなっていった。子どもが目をキラキラさせて学んでいる姿や、先生が長い見通しを持って授業を考えている姿を見て、より見取る力を伸ばしたいと思った。私は、以前から授業参観後の語り合いや授業後の振り返り（教員のみでの）に苦手意識があった。あの場で、自分はなんと言ったらいいのか、何を言えば先生方のためになるのかを考えてしまう。専門外の授業を見た時

には尚更言えなかった。よく語りの場では「子どもの姿をもとに語る」という言葉を耳にするが、どう言うことかさっぱり分からなかった。だから毎回、「早く終わってくれ…」と思っていた。附属に移動して、メンターの先生や院生と語る時間は増えたが、私の見取りを語る苦手意識は払拭できずにいた。見取りを、見取りで終わらせてしまっていたことが私にとっての大きな課題だった。金カンで「記録や見取り」について考える時間が5月頃にあり、「チャンスだ！」と思い、そこで自分の悩みを伝えた。その時に、ある先生が「子どもの姿をもとに語るるとよく言うでしょ？授業で子どもの姿を追っていれば、音声言語ではない変化も見取ることができる。その変化や行動を含めて、解釈をするということ。子どもを軸に、その子の良さを視点として解釈をしていく」とおっしゃった。自分にとっての語りのハードルが少し下がった気がして、これなら私もできるのではないか。と思った。その日をきっかけに、授業を通していろんな子を見取るようにした。すると、子どもを通して授業を見ることが楽しくなった。子どもが目をキラキラさせて活動に取り組んだり、ぐっと悩んだりする姿にいつも驚かされる。また、メンターと授業の振り返りをする時は、「先生のためになること」ではなく、「子どものありのままの姿を語る。子どもの姿をもとに、自分なりの解釈を加える」ことに意識するようになった。メンターが時間をかけて省察していることに私も加わっているからこそ、見取りをもとに語ることに対して、少し抵抗がなくなってきた。3年間で、自分の記録の取り方もだいぶ変わったと思っている。より深い解釈ができればいいのにと反省することもまだまだある。残りの3ヶ月も見取りを大切に過ごしていきたい。

新しい環境で受け入れてくださった附属の先生方や、いつも金カンや日常生活で支えてくださっている院生、スタッフの先生方、エネルギーあふれる子ども達との出会いに感謝しながら、3年間の学びを一旦、区切りとして無事終わられるよう、残りの3ヶ月を過ごしていきたいと思う。



ミドルリーダー/マネジメントコースだより

迷いからのスタート—教職大学院での学びと気付き—

ミドルリーダー養成コース1年/宮古島市立久松中学校 下地 研範

4月から教職大学院に所属し、新たな年度をスタートさせたが、いつの間にか2024年も終わろうとしている。4月の自分を振り返ると、自ら進んで大学院で学び直す選択をしたのにも関わらず、初めは何を目指していくのか不明瞭な時間を過ごしながらのスタートであったように思う。自分の軸があったはずなのに分からなくなって迷子状態。森の中の草木をかき分けて、いや、霧の中で実態のないものをかき分けていくような感覚なのだろうか。毎月の月間カンファレンスで、東京サテライトに集まる先生方と学びを進める。学びながら、これまでの学びを省察する。学んでいるのだが、自分の中に落とし込めていない状況。そんな悶々とした中で夏期集中講座に突入していった。

Cycle 1では、「福井発 プロジェクト型学習 未来を創る子どもたち」を読み進めながら、福井の生徒の実践と勤務校の生徒の実践を頭の中で並列させた。特に疑問に思ったことは、どうして福井大学教育学部附属義務教育学校の生徒の活動は上手くいくのだろうかということだ。

話し合い活動が大切である。共有の時間が大切である。このことは、何も福井に限ったことではない。だがどうして福井では上手くいくのだろうか。生徒のコメントで「基本的に自由だが、それでも生徒は模範的かつ大胆に行動している。見られているからだ。いつも見られているから緊張する。緊張するから必死になる」とあった。頻繁に国内外から多くの視察がやってきており、その度に生徒たちは頑張っているのだろう。ただ、それだけでここまで上手くいくとは考えにくい。読み進めていくと「文化」という言葉が度々出てくる。また、その言葉を生徒も使う。例えば、生徒国際フォーラムにて自分たちが取り組んでいる

学年プロジェクトを発表し、そこでの学びを振り返っているコメントでは「学校に戻ったらみんなに広めたいな」「仲間をどうやって増やしていくかが課題だと思う。音楽文化みたい、文化として発展していくといいな」(P118)。ここでいう「文化」とはなんだろうか。文化には、生き方や習慣、科学、芸術など様々なあり方を含んでいると考えているが、ここでの「文化」とは「意思」だったり「誇り」の意味合いが強いのではないかと考えている。これまで先輩たちが築いてきた学年プロジェクト、福井での学びに誇りを持っている。保護者や地域の人々も同様である。その「文化」の概念を持っているからこそ上手くいくのではないか。もちろん私の勤務校の生徒も「文化」の概念を持っていないわけではないと思う。誇りや意思。抽象的ではあるが、方向性が少し見えてきた時間であった。

Cycle 2では、「コミュニティ・オブ・プラクティス」に出会う。読み進めながら「実践コミュニティ」とは何かを考えていくと、特殊なものではなく誰もが何らかの実践コミュニティに所属していると思えてくる。話を企業組織ではなく、教育の場に置き換えてみるとどうだろうか。例えば、福井ラウンドテーブルで話を聞いた福井市立社北小学校で実施されている「語ろっさ」がすぐ脳裏をよぎった。さらには、東京サテライトでの学びは実践コミュニティそのものであろう。

では、私自身が所属するコミュニティを考えてみると、宮古理科研究会のコミュニティが挙げられる。このコミュニティについて、実践コミュニティの3つの要素を確認していく。「領域」は理科における探究的な学びやメンバーそれぞれが持つ理科の話題であると考えられる。「コミュニティ」については、メンバー

が相互に交流し、支援し合うためのネットワークが存在しており、定期的な集まりや対話を通じて関係を築き、学び合う関係性となっている。「実践」については、様々な知識の共有ができています。特に好評であったのは、実験方法の共有であった。メンバーからの話題提供において、「花粉管の伸長の実験が上手くいかないのでもいつも映像のみでの学習となっている」とコメントが上がった。この悩みを抱えているメンバーは意外にも多いことが分かり、どのように実験を行えば上手くいくのか、やり方を知っている先輩教師の実演と共に知識の共有を図ることができた。なんだか良い方向にコミュニティが成長しているかのようにだが、実は理科研究会は長い間活動停止しており、活動が再開されたのはここ数年の話である。なぜ活動停止の状態であったのかは定かではない。当初の目的は、理科の教員同士で集まりながら気楽な情報交換の場が始まりであったと聞いている。もしかしたら、いつしか参加が強制的になったり、授業研といった専門的な部分が強くなり、アクティブグループや周辺グループのメンバーがどんどんいなくな

り、ついにはコアメンバーも機能しなくなっていった可能性があるのではないかと。一度活動停止したコミュニティが再活動していくケースが珍しいものなのか、そうでないのか判断しかねるが、再開したこのコミュニティをどのように捉え、活用していくか考えるのも非常に面白い視点かと考えている。

これまでの状況とは一転して、夏期集中講座での学びは、上記の通りとても有意義な時間であったと感じている。そして私が最近よく考えているのが、「勤務校の組織体はどうして上手くいっているのか？」である。決して自慢しているわけではないが、非常に働きやすい。4月からこれまで様々なことに全職員で取り組んでいるが全て上手くいっている。職員一人一人が強制されずとも組織的に動いている。それはなぜなのか。要因はどこにあるのか。上手くいっているこの組織の状況をどうにかして言語化できないか。これから取り組む長期実践報告の方向性を考えながら、これからも歩みを止めずに少しずつでも前へ進んでいきたいと考えている。

緩やかな関わりの中で見えたもの

ミドルリーダー養成コース1年履修/福井大学教育学部附属義務教育学校前期過程

浅井 綾子

本年度、「ふくいアートプロジェクト」に参加させていただいた。「ふくいアートプロジェクト」とは、アートを通して、大学、教育現場、地域、行政が協働して、地域の参加者全員が遊び込む機会や場を創造していくことを目的として企画されたものである。この活動に準備から携わらせていただき、子供たちが楽しそうに何かを作っている姿や作り出したものに喜んでいる姿、周りの大人が子供と一緒にしながら活動に参加している姿を見ることが純粋に楽しかった。そして、私自身、このプロジェクトに参加し、取り組んでいくこと自体とても楽しいと感じていた。初めて出会う保育園の先生方、学生の方たちと共にプロジェクトに取り組む中で、自由にアイデアを出し合い、そのアイデアに対して「面白い」「いいね」

と共感し合いながら作業を進めていく過程がとても心地よかった。他者のアイデアを否定せず、自然とみんなで知恵を出し合う雰囲気、無意識に居心地の良さを感じていたのである。なぜ、このような楽しい気持ちを感じることができたのか。それは、このプロジェクトには、「緩やかな時間」、「緩やかな人との繋がり」、「緩やかなテーマ設定、ゴールイメージ」があったからだろう。この空間には、常に「緩やかさ」というものが存在していた。時間的な制限、プロジェクトの意図はあるものの、その中の活動内容や在り方は参加者に委ねられ、無理のない、できる範囲での活動であることが参加者全員の心の中に自然と染み渡っていたのである。活動そのものに緩やかに寄り合っていくこと、ここにこのプロジェクトの大き

な魅力があり、それこそが参加者に心地よさを与えるものになっていたのではないかと思います。

日々の授業実践を振り返ってみると、自分の授業の作り方は、進度を考えることばかりに重点が置かれ、「～しなければならない」に囚われているように感じる。図画工作の授業を行っている時も、社会創生プロジェクト(生活科や総合的な学習)を行っている時も、どの教科においても先行するのは、教師側の授業の進度調節であり、教師が求める到達度のレベルであった。子供たちが自然と活動にのめり込んでいくのではなく、教師が管理者のようなポジションで、子供たちの活動をコントロールしていることに改めて気付かされた。教師＝管理者であったからこそ、活動の時間を教師の都合で区切り、道筋や視点を固定化することで、子供たちの行動や発想に制限をかけていたのである。「ねばならない」とらわれていた私は、日々の授業をこなすこと、進めることに精一杯になり、純粋に創作を楽しむことを忘れていたのである。子供のような緩やかな遊び心、知らないことを知りたい、やってみたことのないことに挑戦してみたいという素直に物事を楽しむ気持ちを置き去りにしていたのである。

今回、このアートプロジェクトでの取り組みを通して、授業に対してもっと緩やかに子供が関わられるようなしなやかさをもちたいと感じた。以前のカンファレンスで現在行なっている社会創生プロジェクトの内容をお話した時に一緒になったファシリテータの先生から、「子供の興味がコロコロ変化していくことは、自然が多種多様に変化していくことと

リンクしているのではないかと教えていただいたことがある。その時は、先生の言葉の真意を理解することができなかった。しかし、こうしてアートプロジェクトに参加した今、彼らの様子を捉え直してみると、子供たちの興味の移り変わりは、誰にも制限されない、自由な発想と純粋な好奇心に満ち溢れていることに気付かされた。子供たちの中には次々と新しい発見と問いが生まれ、その問いのおかげで、授業に新たな視点が加わったり、教師が予想もしていなかった展開へと活動が深まっていったりしたことが多々あった。先のことを思うと教師が活動をコントロールしてしまいたくなるが、もっと子供と対話し、子供の感性に委ねながら、そして教師自身も子供のように純粋に授業を楽しむ気持ちをもちながら進めていくことが大切なのであろう。

現在勤務している学校でも、子供たちの自由な発想や探究を大切にする授業が求められてきたことに間違いはない。しかしながら、私はその意味を、理論的にしか捉えることができず、表面的な理解に留まっていたように思う。今回のプロジェクトを通して、自分の中でその言葉の意味を再構成することができ、教師自身が純粋に創作を楽しむ授業を展開していくことの大切さを、身をもって感じることもできた。言葉だけで理解することが本当の学びではなく、自分自身の体験として体や心に染み渡らせることが本当の学びであると思う。大学院の先生に薦められて参加したアートプロジェクトは、私にとって大変有意義なものであった。

大切にしてきた変わらないこと

ミドルリーダー養成コース2年/さくら認定こども園 山田 ゆみ

入学してからそろそろ2年が経とうとしている。長期実践報告を書くにあたって、日々の園での実践はこの2年間でたくさんあるのに、自分の変容がはっきり分からないでいた。入学当初、ここに来た以上は何かを変えなければいけないという気持ちや、卒業する時には何かが変わっていなければならないと

いうプレッシャーがあったように思う。それは、教職大学院の卒業生である園長先生や教頭先生(当時)らが保育の改革を大きく進めてきたことにもあるのだろう。

先日、11月のカンファレンスのあとに、長期実践報告を書き始めるにあたって宮本先生が私の話を聞いてくださった。私がこれまで大切にしてきたことは何ですか、と問われた。時代が変わっても変わらず大切にしてきたことがあるはずだと。この園で27年勤務してきたが、一斉保育時代から始まり、180度の方向転換をした改革時代から現在にいたるまで様々な保育を経験してきた。私は自分が何が変わったのか、変えようとしてきたのかを必死に探しているのに、変わらない大切にしていることを問われたことで少し戸惑ってしまった。子どもの成長を焦らない保育をしたいという思いを一通り聞いてもらった後で、私が大切にしたい事は「スローナレッジ(slow knowledge)」ということに近いのではないかとその言葉を教えていただいた。初めて聞く言葉が気になり、後で少し調べてみた。「ゆっくり得た知識」「急がない子どもと急がない大人」そんな言葉が出てきた時に、私が無意識に大切にしたいと思ってきたことはそれなのかもしれないと思い始めたら、一気にそこから保育の記憶とその時の思いが蘇ってきた。

1年前、私は当時2年目の保育教諭と組んでいた。木の実プロジェクトという探究活動をしていたA先生は、木の実がたくさん落ちる時期にゆっくりと戸外を歩き、子どもたちが地面に落ちている木の実を見つける度に足を止めていた。散歩に出る度に道端や公園で木の実をたくさん拾って帰った。そのうちに子どもたちは上を見上げるようになった。下に落ちている木の実はその木から落ちてくる物なのだとある時誰からともなく気づいたのだ。木の実は木から落ちるものだと少しの時間をかけて知ったあと、今度は木を見上げてどんぐりの葉っぱから探すようにもなった。また、椿の実は量が少なくて貴重だった。はじめは椿の花びらが落ちている周辺の枯れ葉をよけながら探していたが、そのうち椿の花が咲いている木を先に見つけようとするようになった。木の実の遊びがそのまま発表会に繋がり、その頃には木から木の実が落ちる絵本の一場面を子どもたちは当たり前前に受け入れていた。A先生との散歩は子どもたちにとって心地の良い時間だったのだろうけれど、今思い返すと私にとっても同じだった。A先生と気

が合ったのも、保育に対して同質的なところを感じていたからなのだろう。遠くの公園に行ってみたくさん歩くだけの散歩。行ったことのない公園を開拓することに一生懸命になること。遠い公園にいかにも早く到着できるか時間をはかること。そんなことだけに達成感を感じる散歩に嫌悪感を抱いていたことにも納得がいく。

数年前の探究活動も思い出していた。3年間海プロジェクトをしていた時の5歳児での出来事だ。山から川へ、川から海へとつながる自然の仕組みを感じて欲しい。そんなねらいや願いもあったプロジェクトだった。ある時期に「かわ」という絵本を子どもたちに紹介した。この絵本には川だけでなく山や海も描かれている。絵本の中に描かれた山がその時のBくんの山の全てだった。その絵本を知った後に、九頭竜川を上から眺めることができる施設へ出かけることになった。何階だっただろうか、建物の展望台に上がって周りを見渡したBくんが「前にも後ろにも山がある…」と目を大きくしてつぶやいたのだ。絵本では感じられなかった立体的な自然を感じた瞬間の感動が、そのひと言に全て込められていたように思えた。Bくんは今小学校高学年である。この時の経験が今どんな形につながっているのかは正直分からない。しかしこのゆっくり知識を得た経験は、知識を入れようと急ぐ一方的な教えよりも心に響いた経験になったのは確かだと思うのである。

最近の活動を振り返ってみてもそうであった。カブトムシの幼虫の飼い方などネットで調べてしまえば今の時代すぐに何でも出てくる。だけど、まずは図鑑を開いて友だちと調べ、家庭で聞いてきてもらい、最後には地域の専門の人に助けを借りていくという活動を選んできた私はやっぱりどこかでスローなことを望んでいるのだと思う。この時代にその必要があると思っているのはどうしてなのだろうか。また自分に問い直ししながら実践を振り返ってみたいと思う。

今回私は、変わらず大切にしていることについて考える機会を持つことができ、自分の保育感を知らず大きな手掛かりになった。変わらなければいけない、のではなかったのだ。

提案授業に挑戦

ミドルリーダー養成コース2年/福井市役所 Santamaria Juan Florencio

11月に私はW校にてALTとして提案授業に参加させていただく事が出来ました。それは勿論英語の授業で、メインになる人はM先生という先生でした。去年度協力をしてくれたD先生が偶然このW校にもいらして、M先生の力になってあげてと頼まれました。とてもお世話になったお方のお願いだだったので、私はM先生の協力者になりました。

M先生は5年生の英語担当になりました。普通学級は今年度で初めてで、その上に英語の授業の経験ありませんでした。M先生が4・5月やっていた英語は、課題が多いように感じました。まずは「いい授業」とはどんなものか分かってもらわないとダメだなと思いました。私がメインでやっている6年生の英語の授業を見て、それらの授業の長所と短所を自分で考えてもらうようにしました。7月からは、分かったことを自分の授業で応用してみることにになり、段々レベルアップは見られましたが、11月の提案授業の締め切りまでには間に合わないようでした。協力者として私も悩みに悩みましたが、どうにか出来る方法を思いつくことができなかつたので、10月のカンファレンスでグループの皆に相談を聞こうと決めました。パブロと言うアルゼンチンからの留学生から「予定している授業のプランを作って見せてあげたらどうだ」と良いアイデアをしてくれて、そうしました。でも教諭は十人十色で、指導案は一緒でも進行の仕方が異なるという問題に気付きました。

11月に入って、提案授業までは間もないと焦ってレベルの底上げのペースを更に加速することにしました。打ち合わせの時間は残業になるぐらい長くして、授業を計画する際に私が重んじるポイントを解

説したり、授業で今まで使った活動や授業を計画したりする際に私が重んじるポイント等を解説したりしました。これらの取り組みで、提案授業用の資料が週に2・3回ぐらい変わっていきました。6月からという短い期間でしたが、頑張った成果は見る事ができました。

そして、提案授業の日になりました。私はW校に到着した時、緊張のあまりに頭が真っ白でした。部屋に入り、机の上に置いてある指導案を見つけました。その指導案に目を通すと、それはさらに手が加えられて、改善されたものであることに気づきました。微笑ましく思いながら、私は教室に踏み入れました。教室の後ろには珍しくスーツ姿を着ている先生方が20人程いらっしゃいました。チャイムが鳴って、授業が始まりました。

授業自体は、提案授業という緊張状況を考慮しても、上手くいったように感じました。授業の進行や展開が上手く進み過ぎて、予定していた内容をとても早く終わらせてしまったというM先生の課題も残りましたが、私はそうなることを察してM先生のフォローをしました。提案授業が終わり、私はその後の研修会にも参加しました。他の先生からの意見を踏まえて、M先生は12月に入ってからも授業をさらに良くしようと挑戦しています。

10月カンファレンスでは己の知識等を次世代に伝えるというようなテーマがありました。今年度、私はそれに挑戦してみたが、まだ終わっていません。これからM先生は教諭としてどう変わっていくのか、これからの楽しみとなります。

自分にできること

学校改革マネジメントコース1年/奈良教育大学附属小学校 河田 慎太郎

私は、昨年度までは奈良女子大学附属小学校に所属していたが、今年度は奈良教育大学附属小学校に赴任することになった。本校は、昨年度教科書未履修が問題となり、教育課程を組みなおしたり、長期休みに回復授業を行ったりしている最中である。

勤務してから最初に取り掛かったことは、学級づくりである。本校は、子どもたちの自由を尊重し、育つのを待つ風潮があるように感じる。そのためか、子どもたちそれぞれが学級のために役に立つ仕事を考えて実行するような学級活動や、6年生が、平和学習で学んだことを全校の子どもたちに伝えるような全校集会など、子どもから子どもに伝えるような学習活動が特徴的である。反面、子どもたちの中には我慢強さが無く簡単に音を上げてしまったり、休み時間から学習時間への切り替えが苦手であったりする子どももいた。

そこで、私の学級では、自由をはき違えないように気を付けることにした。例えば、日直の朝のスピーチでは、話している途中で話し手に聞き手が話しかけることについて、ルールを作って指導した。聞きたいことがあったら話し終わってから質問することで、聞く力が育ったように思う。このルールが守られるようになることで、学習中でも、聞く態度が育ってきた。そうすると、手を挙げて発表する子が増えるようになった。

また、学習中は、必ず教科書を開かせるようにした。教科書未履修の問題を解決するためということもあるが、学力差がある学級では、共通の課題に取り組んでいる意識を持たせたいことや、その教科が苦手な子に子ども同士で説明するとき、教科書の図や考え方が大変参考になるからである。教科書を開くことや、自分が思ったことや友だちの良い意見をノートにまとめることで学習に集中できる子どもが増えてきたと感じている。

次に、学級の机の配置をコの字型に変え、日直が司会をするスタイルに替えた。このスタイルは、子ども同士が向き合って学習が進められることにより、一人ひとりの意見を大切にできるようになると考えている。教師に教えてもらっている学びから、子どもたちが自ら進めていく学びへの変換を目指したのである。今では、司会の子どもたちは、始業終業のあいさつ、本時の学習内容を簡単に伝えること、学習時に発表する子どもを指名することなどが中心である。今後、学習計画（学習の中心となる部分を考え時間配分を考える）や、可能な部分の板書などの仕事もできるようになると良いと考えている。

ICT機器の積極的利用も考えている。学校が変わるとネット環境の違いから、自分が準備した画像や、子どもが調べた画像などを大型テレビの画面に映し出すことが難しかったが、情報担当の教員と相談して、余っているアップルTVの存在を知り、昨年度使用してきた環境とほぼ同じような環境で使用できるようになった。この点については、他学級でも同様に使用できるように進めていきたいと考えている。

このように、今までと違う学習になることや学年で学習の方法が違うことで、子どもや保護者に不安を与えるのではないかと考えている。子どもたちには、どうしてそのような学習をするのか説明したり、子どもたちにやってみたいかどうか確認してから行ったり、主体的な学びの良さを伝えたりすることで、前向きに取り組むようになってきていると感じている。保護者には、学級通信やPTA（保護者会）で伝え理解していただいてから実施してきた。

今後も、私が今まで取り組んできた学習法や、ICTの環境づくりなど、自分にできることを考えて提案していきたい。

もし教職大学院で学んでいなかったら

学校改革マネジメントコース1年履修/あわら市立芦原小学校 吉田 仁一郎

福井大学連合教職大学院に今年の4月に入学して9か月、もう12月だ。1年履修のため、昨年の夏期集中と冬期集中、2月のラウンドテーブルを経て今年度を迎えているが、冬期集中を目前に焦る気持ちでいっぱい。1年履修の諸先輩方もこのようなタイトなスケジュールを何とかくぐりぬけて長期実践研究報告をまとめ上げてきたのだと、頭では分かっているものの、若干1年履修を後悔している。何といても時間が足りないのである。今年4月からは異動により、5年間過ごした県教育総合研究所を離れ、学校現場に復帰している。ただ、初めての小学校勤務と校務分掌で、夏休みまでは特に見通しをもつこともできず、あたふたしていた。一方、教職大学院での生活はというと、当初は苦しかった毎月のカンファレンスのグループ内での対話にもだんだんと慣れ、ようやく楽しむことができるようになり、「もう少しじっくり教職大学院生活を送れたらよかったのに」という心境に変わってきていた。対話の真の意義、つまり対話を通して自分の実践を省察したり、新たな気づきを得たりすることができるという経験をカンファレンスや夏期・冬期集中のCycleで対話を継続的に繰り返すことでようやく得ることができたのである。実は、県教育総合研究所では、昨年度からカンファレンス方式の所内研修を行っていた。部署を超えて、また校種を超えて語り合うことで、業務

上話す機会を持つことがなかった所員の実践やその人の考え方などを知ることができ、同僚性の向上には間違いなく寄与していたが、この教職大学院で今年得ることができた感触には届くことができなかった。実践→語り合い→省察・気づきのサイクルの経験が自分にはまだまだ足りていなかったのであろう。

さて、本文のタイトルに書いた「もし教職大学院で学んでいなかったら」であるが、ここで得ることができた出会いや学び、先生方からいただいたアドバイスなど、これらがもし無かったらと考えただけでも、自分にとって大きな損失になっていたであろう。教職大学院に入らなければ、まず手に取ることもなかったであろう集中講座での、「コミュニティ・オブ・プラクティス」「学校づくりの記」「学習する組織」の理論書や実践書との出会いしかり、時間を作って、他校の授業検討会などに参加したこともしかり、間違いなく、日々の授業や業務で短視眼的になってしまっていたであろう自分に多くの刺激や新たな視点、もっと学ばなければならないと背中を押してくれていた。

今、その時々（夏期集中講座で木村先生が話された）「自分の感情を手掛かりに」長期実践報告を構想しているところである。

対話を通じて相手を理解すること

学校改革マネジメントコース1年履修/福井県教育総合研究所 佐藤 義信

私はこれまで福井大学教職大学院での月間カンファレンスやラウンドテーブル、また福井県教育総合研究所の業務である校内研修コンサルテーション、初任者研修などの悉皆研修等におけるグループセッション、そして所内の学びの場である所内研修会、協

働研究会を通じて、多くの対話の場に参加してきた。その中で向き合ってきた問いがある。それは「何のために対話をするのか」という問いである。対話に参加し、対話の重要性を理解することは、同時に意識的に対話を行うことの難しさを実感することと同じだと

考えている。対話の目的に向き合う中で、さらにいくつかの問いが生じている。「対話はどのように始めればよいか」、「対話を通じてどのように参加者同士がつながっていくとよいのか」、「対話をどのように終えるべきか」、「対話の後どうするべきか」といったものである。これらについて、対話の前に十分考えたり、自分なりに方向性を想定したりして対話に臨むこともあれば、深く考えることもないまま始まり、いつの間にか終わってしまうことも多い。そして対話の相手は、多くの場合初対面の方が多いため、相手のことを理解しながら話を進めていくことになる。

対話においては、率直に語る事が望ましいが、多くの場合、対話の中で本音がそのまま表出されることはない。とくに私の場合、「研究所の職員」という肩書を背負っているため、無意識にプレッシャーを与えたり、正解を言わなければいけないというような焦りを生じさせたりしているのかもしれない。このように、無意識のうちに対話を阻害する要因を緩和させるためにも、ファシリテーターを務める場合には、対話の場のデザインは慎重でかつオープンにしたいと思っている。ファシリテーターとして、対話を導いたり、うまくまとめたりすることから離れ、じっくり傾聴することを通して、本当に自分が知りたいと思うこと、わからないと思うことを謙虚に聞いていく中で、相手を理解することができたらと考えている。「言葉に関わる」とは、最近読んだ本で書かれていた表現である。聞くことの重要性を示唆している言葉だと思う。

当研究所では、所員が課ごとにグループを組み、業務改善に関わる研究に取り組んでいる。私は「現場

とともに高めあう研究所とは」というテーマで研究を進めている。私は「学習する組織の在り方」について『チームが機能するとはどういうことか』という書籍をもとに、教師同士が学び合うための組織の在り方について考察している。課内で相談している際に、ビジョンを共有することの重要性について話が盛り上がった。『チームが機能するとはどういうことか』という書籍では、よく医療チームのことが例に挙げられる。「患者の命を救う」という明確なビジョンが医療現場では共有できるのに対し、学校の場合、「子どものために」というビジョンは、壮大であるがどこかはっきりしないビジョンである。達成のための時間的な制限も明確ではないだろう。さらに、理想とする子どもの姿、実現するための方法論や働き方も、教師一人一人の背景によって異なる可能性もある。そもそも同じビジョンなど持ちようがないのかもしれない。それでも、時代に応じて生まれる課題を乗り越えていくためには、教師同士が学び合い、解決策を生み出していく必要があると思われる。そのためには、協働者たる同僚を理解することから始めないといけないのではないだろうか。同僚は何を大切にしているのか、何を目指そうとしているのか、相手の意見に謙虚に耳を傾け、理解することで、少しずつ共有するものを大きくしていけばよいのだと思う。それすらも、人によって異なるかもしれない。何のために対話をするのか—先日若狭高校で行われた P4C の講演会に参加した際、講師の先生が” We are not in a rush.”とおっしゃっていた。対話の目的を考えるあまり、その効果にすぐ結論を求めてしまうが、慌てず、暫定解を更新しながら、対話に向き合っていきたい。

学びから生まれる 小さな一歩

学校改革マネジメントコース1年/岐阜聖徳学園大学附属小学校 山田 亜都子

早いもので 2024 年があと数日で終わろうとしている。ニュースレターの原稿を書きながら、教職大学院学校改革マネジメントコースに入学してからの自分を思い出していた。

入学して何回かの月間カンファレンスは、岐阜から福井へ向かう道中、憂鬱だった。それは、自分の取り組みに自信がもてず過ごしていたからだ。「大学院に入学したのだから何かしなければ」と思いながら、

日々の学校業務に追われる。結果、自分の取り組んでいることに自信がもてないまま月間カンファレンスを迎える。「今日は何を話せばいいのだろう」「先生方の前で自分は何が語れるのだろう」と迷走しながら、車を走らせていた。同じコースの先生方は、学校組織のためにきつと立派な実践をされてみえる。それに比べて私は……。そんな気持ちで、月間カンファレンスやラウンドテーブルに参加をしていた。

私は私立学校に勤務をしている。職員の入れ代わりがほとんどなく、人事の交流もない。そのため、私たち教員は、自ら足を運び、学びに行かなければ「井の中の蛙大海を知らず」と言っても過言ではない。そんな教員集団が、それぞれの思いや願いのもとで子ども達を育てているのである。私が教職大学院へ入学を希望したのは、その教員集団にどうにか風を吹かせたい、それぞれの教員を同じベクトルに向けたという願いがきっかけだった。学校を管理する立場ではなく、学級担任兼学年主任を担っている私は何をすべきなのか、そして、組織のために何ができるのかをいつも一人で悩んでいた。そのため、月間カンファレンスやラウンドテーブルへの参加は、いつも不安だった。しかし、今の私にとって、大学院での学びは私の大きな支えとなっている。

グループセッションではいつも、年齢も、経験も、立場も違う先生方と語り合い、学びを共有する時間だ。先生方の実践に耳を傾けると、実践に驚いたり、感動したり、共感したりしながら、正直さらに不安になるのだ。しかし、同時に、私にたくさんの気づきや学びも与えてくれる。グループセッションでは自分のことも、自分がその時、感じ、考えたことも話することができる。そして、自分が悩み、迷っていることが解かれていくのだ。それはきつと、巡り会う先生方が

温かく、そして親身になって私の話に耳を傾けてくださるからだ。それなのに私は、いつも誰かと比べていたのかもしれない。そうではなく、私は私の置かれている立場と、私の勤務校の実態に合わせた私なりのやり方で取り組んでいることに、先生方と語り合う中で気づくことができた。気張らなくても、私なりのマネジメントができているのだと励まされた。だから、私は、私のできることをすればいいのだと思えた。カンファレンスが終わった帰りの道中、清々しい気持ちになっているのは学びや気づきがあったからだ。それに気付いたとき、福井に向かうことが楽しみになっていった。

大学院で学ぶと、私一人では何も変わらないということを感じさせられる。何より、私自身が組織の中にいる一人の教員であることを思い起こさせられる。そのたびに、学校に帰ったら、隣の席の先生に、学年の先生に、仲のいい先生に相談してみようと思えるのだ。学校ではいつも「各学年の学年会や子ども達の学年集会を大事にしましょう。学年で一緒に頑張りましょう」と一貫して話をしている。実際に、学年間での対話が定着しつつある。いつも対話の中から新しい課題や取り組みが生まれている。対話が教員をつなぎ、その対話から生まれる課題や取り組みが子どもを育てている。「組織を変える」「組織をつくる」などという大きな目標を達成するには、ものすごく時間がかかりそうだ。しかし、「対話」を続けることで「つながり」を実感できる日常がある。その日常を続けるために何ができるかを、今、考え始めているところだ。

大学院での学びを学校現場に返し続けることで「学校改革マネジメント」の小さな一歩につなげていきたい。

出会いと対話から学ぶ

学校改革マネジメントコース1年/福井県立若狭東高等学校 細川 和孝

教職大学院で学び始めて9か月が経った。これまでのカンファレンスで私が工業教員として積み重ね

てきた教育実践を振り返り、省察し、語ることで、自分や所属する実践コミュニティがこれまでに生み出

してきた教育的価値や力量形成について気づかせてもらっている。また、校種の違う先生方と出会い、対話を重ねる中で、多くの気づきや学びを得ており、私の研究テーマである「学科再編、探究を中心に据えた新カリキュラムづくり」にそれらを活かしている。次年度から新しいカリキュラムでの新工業科「工業創造科」がスタートすることが決まっており、まさにコミュニティ・オブ・プラクティスにあるような古い実践コミュニティが終焉し、新たな実践コミュニティを誕生させようとしているところである。

カンファレンスや夏期集中講座の中で、違いを持った実践者がそれぞれの取り組みで学んできたことや思いを本音で語り合うことで、問題解決のヒントをもらえたり、価値に気づけたり、励まされたりとお互いを支え合うことができ、それが実践コミュニティでの活力となって、価値を生み出す大きな原動力になることを実感してきた。それを私の取り組んでいる学科再編、新カリキュラムづくりにおいても活かそうと、工業科の先生方が語り合える場を設定し、何度も何度も話し合いを重ねてきた。時には全員集まってもらいカリキュラムを検討し、時には個別に課題について相談したりと、先生方が本音で話せるような空間と時間を設定しながら、新しい学科や工業教育への思いを語り合ってきた。その結果、1, 2, 3年生と探究の継続的な流れがつけられるようなカリキュラムが出来上がり、新学科名(工業創造科)も決まり、現在は次年度からの実施に向けたより具体的に細かな計画や必要な機材の準備などを進めているところである。これまでも短期間で決定しなければならないことや、意見の違い、思いの違いなど様々な困難があったのだが、実際に新カリキュラムを実施する過程で、今後まだまだ乗り越えなければならない困難や問題が出てくると思う。そんなとき、協働探究者である教職大学院の先生方に、これからも気づきや学び、活力をいただきながら前に進んでいきたい。

10月のカンファレンスで横浜市の先生が「人が育つとき、そこには出会いとエピソードがある」と語られた。人生を振り返ったとき、私にとっても確かに成

長する時には出会いがあり、出会いをきっかけに「観」が変わり、見えるものが変わってきた。

人との出会いと対話による学びは、多種多様な「ものさし」をもつことでもあると思う。「こんな見方、考え方があるのだな」と気づかせてくれる。

工業には様々な種類や大きさの「ものさし」があり、つくるものや測るものによって、使うものさしも変わってくる。そのものさしでしか測れないものがある。それは人でも当てはまり、様々なものさしを教師がもっていなければ、ある型(ものさし)に当てはまらなければ駄目となる。そうではなく、このものさしで見ると、この子はすごい才能をもっているということが分からなければいけない。多種多様なものさしを得るために、子どもからも大人からも学び続けることが重要である。その機会が出会いで得られるのだと思う。よって、出会いはものさしを得るための機会であり、あらゆる出会いに意味があると言える。

幼少期から現在に至るまで、この人と出会ったからこそ今の私があるという人が何人もいる。これはご縁や運命とも言えるが、今やオンラインで福井県にいながら日本中、世界中とつながり、多様な人たちとご縁がもてる時代となった。私は現在、教職大学院の他にもリアルコミュニティとオンラインコミュニティに入っており、そこでの人との出会いによって学校のコミュニティだけでは知れない社会の情報や、答えのない時代を生き抜くための知恵を得ている。教師として子どもたちの一歩、二歩先を進んでいなければならないと考えており、日本社会が、世界全体がどう進もうとしているのかを、一早くキャッチして動き、教育に活かしていく必要がある。その思いから、複数のコミュニティに所属しているが、それができる時代であり、そこでの出会いから確実に見える景色が変わり、多くのものさしを得て成長させてもらっている。そして、教職大学院での先生方との出会いもまた、私を大きく成長させてくれると確信しており、今後も先生方との対話から、たくさん学び向上し、新学科や学校づくり、生徒の育成に活かすことで未来を創造していきたい。

校内研究を考える

学校改革マネジメントコース1年/千代田区立麴町小学校 田村 砂弥香

校長として本校に着任して2年目。昨年度の校内研究は、前年度からの引継ぎで、理科・算数の研究に取り組んだ。年間5回の研究授業を行い、その都度、それぞれの教科を専門とする大学教授を講師に迎え、研究協議会を開催した。授業を振り返って教員同士が意見交換し、講師から指導・講評をいただいた。毎回の研究授業後には、授業者を囲んで打ち上げをし、職場の懇親を深めることもできた。

しかし、私は何となくもやっとした物足りなさを感じていた。

まず、研究授業が近付いてくると、授業を担当する学年が遅くまで残って打合せをしているものの、どのような課題に対し、どのような議論があって授業が構成されたのか分からない。また、研究授業の結果、子供にどのような変化があったのか分からない。そもそも効果を検証する手だてが設定されていない。そして、校内研究を通して見出されたはずの知見が、他の授業に生かされている様子がない。

総じて、研究授業を行うこと自体が目的化しているのではないか、という疑問がわいてきた。だとすれば、限られた時間と労力を割いて、一体何のために研究授業を行うのだろうか。

そもそも本校は私立中学校進学を目指して塾に通い、主要教科の学習内容を先行して学んでいる児童が多い。あえてそういった児童の興味・関心を惹き付ける教科学習を研究することにも意味はあるが、担当する学年・教科も異なる中で、誰もが自分事として取り組める研究課題になるだろうか。そして何より、その研究は教師にとって子供にとって楽しいのだろうか。学校だからこそできる学びとは、一体何なのだろうか。

本校の児童には、その賢さを生かして、社会に出れば必ず直面する答えのない問いに向き合い、多様な他者と協働し、最適解を生み出す力を身に付けてほしい。それこそが、進学塾ではできない、多様な子供

たちが集まる学校だからこそできる学びである。そのために、探究的な学習をテーマに校内研究に取り組みたいと考えた。また、本校は東京都の中心部に位置しており、児童も極端に都市化の進んだ環境で生活している。児童の視野を広げ、世界は広く多様な魅力にあふれていることを、学習を通して実感してほしい。そのために、同じ東京都の中でも豊かな自然と歴史を有する小笠原村の学校と連携して、教育活動を展開したいと考えた。

昨年度の後半から、職員会議等でそうした考えを少しずつ発信し、今年度の学校経営方針で探究的な学習を校内研究に設定した。力のある中堅の教員に研究主任を託し、夏休みまでは研究授業を設定せずに、探究的な学習についてまずは勉強する期間を設けた。4月に福井大学教職大学院東京サテライトの福島昌子先生を講師にお招きして、校内研修会を実施した。「探究とは、学びの質を深める学習活動の充実」と題して、演習も交えて研修を行った。

校内研修会にはみんな楽しく参加し、「日常の中にある小さな疑問点から解決策を導き出し、楽しみながら学ぶことが大切なのだと感じた」「探究学習の面白さの一つに、自分たちで知を構築していくことがあると感じた」といった感想が聞かれた。しかしその一方で、職員室では「結局、何をすればいいのか?」「総合の研究をやるということ?」「研究授業は何の時間でやればいいのか?」と戸惑いや不安の声も上がっていた。ここでもやはり、研究授業をやるのが目的化していた組織の課題を感じた。

そこで、研究主任と相談し、「『探究』をテーマにした研究を進めるための本校の現在地（スタートライン）を明らかにしよう!」として、教員同士で対話する時間を設けた。本校の児童のよさと課題、こんな児童を育てたいという思いなどをざっくばらんに話し合うと、たくさんの意見が出てきた。

また、夏休みには、研究主任を含めて3人の教員を小笠原村に派遣し、その魅力を体感してもらうと

もに、学校との打合せを行った。小笠原小学校でも、地域性を生かした学習に取り組んでおり、本校の取組とコラボできそうなところがたくさんあった。

9月からは、研究授業にチャレンジしながら、本校ならではのカリキュラムづくりに取り組んでいる。

研究授業もまだまだ課題が多く途半ばであるが、このプロセスこそがまさに探究である。教員とともに、うまくいかないことも楽しみながら、学びがいと働きのいい組織を作っていきたい。

私の変化、先生方の変化

学校改革マネジメントコース2年/彦根市立城東小学校 平中 理恵

いよいよ、教職大学院2年間の学びをまとめる時期がきた。先日、長期実践報告の構想をなんとか整理することができた。それを通して感じたことは、「変化」である。

1つ目に感じた変化は、私自身の変化である。私の性格上、半ば強引に引っ張っていつてしまったり、トップダウン的に方針や方法を示したりしてしまうことが多い。そして、それに合わせてみんなが進んでほしい、と思っていたし、「組織」というものは、そういうものだと思っていた。しかし、2年間の学びの中で、「組織」は「人」であり、「組織を変える」ことは、「人を変えること」とも言えるが、それは、そんな強引に進められるものではないし、そうすべきではないということに気付いた。つまり、先生方一人一人が『気付いて』『やってみて』『実感できる』よう、一緒に悩み、考え、実行する手助けをし、手ごたえを感じられるようフィードバックすることが大切なのではないか、という思いをもった。

2つ目の変化は、先生方の変化である。『気付いて』『やってみて』『実感した』先生は、次もやってみようという気持ちをもってくれる。当然、一度で完全に変わっていくものではなく、何度かは揺れ戻しがありながらも、先生自身がこれじゃいけない、と『気付く』と相談に来て、一緒に考え、もう一度『やってみる』というサイクルを繰り返してくれる先生が増えたように感じる。ありがたい変化だ。

例えば、5年担任のK先生。今年度は、大きな授業公開をすることはなかったが、複数の教科で授業づ

くりの相談に来てくれている。日々の授業を変えていこうと、懸命に考えている様子がうれしかった。

また、6年担任のI先生。採用2年目の先生だが、初任者だった昨年は、自分の考えたルールに子どもを乗せようとするあまり、指示が多く、窮屈で、子どもからも反発されてしまうということがあり、悩んでいた。しかし、昨年度1年生の担任や幼稚園・保育園等の保育参観での園の先生から学んだ「どうしたい?」「どう思う?」という子どもの思いを引き出す問いかけを日々心掛けた結果、今年度は、例えば、総合的な学習に時間に子どもたちから「本番の発表前に、学級内でアドバイスし合う時間がほしい。」といった声があがる等、自分たちで考えてこちらにリクエストしてくれるまでになった、と嬉しそうに話してくれた。

そして、4年生の担任のT先生。T先生は、本校の総合的な学習の時間の主任をしている。2学期後半、職員室での会話などの様子から、T先生の学級の総合的な学習の時間が、ちょっと停滞してそんな感じがしていた。ちょうどそのころ、市の教科主任会(総合)で、授業研究会が実施され、T先生も参加された。偶然ではあるが、その授業を提供してくれた学校は、本校と『校内研交換留学』を行っている学校で、私もその研究授業をしてくれた学年の単元構想に関わっていたため、今回の研究授業がT先生が担任するのと同じ4年生の授業であること、そして、その題材が「福祉」と同じであることを知っていた。私は、どのような授業だったか気になり、研究会から帰校したT先生に「どうだった?」と声をかけた。私は、

どのような授業だったかということをお願いしたいという思いが主で、あとは、取り入れられそうなことが1つでも見つかっていればいいな、くらいの思いで声をかけた。ところが、T先生からは「先生、ちょっといいですか？30分くらい…」との返事。その後、職員室内の丸テーブルに移動し、T先生は、今日見てきた授業と自分が行っている授業を比べて振り返り、「今日の授業では、子どもたちが本当に生き生き活動していました。自分のクラスの総合は、今、子どもが“ノッて”いません。今思うと、これまで、車いすやアイマスクなど様々な体験をこちらが準備してやってきたのがよくなかったんだと思う。今のままじゃだめだと思って、これからどうしようか、指導助言の時間はそればかり考えていました。でも、アイデアがまとまらなくて…」等と話をしてくれた。T先生が、この半日でそこまで考えていたことに驚いたが、改めて一緒にこれまでの取組や子どもの姿、そして今の状況を詳しく聞いた。二人で相談する中で、

- ・今は調べたことをポスターにまとめている段階で、探究のプロセスの「まとめ・表現」に当たるので、ひとまずポスターを完成させて子どもたちが掲示したいといった場所に掲示することまでは予定通り行う。
- ・ポスターを見た人からのフィードバックがもらえるよう、簡単なアンケートをお願いする。
- ・アンケート結果から、伝え方に改善が必要だとわかったら、次は誰にどのように伝えればより効果的

かということを考える等、子どもの中に「もっと工夫して伝えたい」という思いが高まった状態で次の探究のサイクルに入る。

というアイデアがまとまった。約1か月後、T先生はアンケート結果をもって私のところへやってきた。「いい具合で、要改善の意見をいただきました」と、にやっと笑いながら結果を見せてくれた。T先生の頭の中には、これを見せたときの子どもの反応が思い描かれていて、これからの『やってみる』を楽しみに思っている姿だと感じた。

今、3人の先生のことについて述べたが、ほかにも、『気づき』『やってみて』『実感』できた先生は、何人もいる。『実感』をたくさん得られた先生は、きっとこれからも「自走」していける。また、自走している途中で壁にぶちあたったとしても、誰かに相談することのよさを知っているから、きっと「共走(※)」していくこともできるだろう。教師一人一人の自走と共走がある学校は、きっと学び続ける組織になるはずだ。

振り返ってみると、これまで私は、『気づき』『やってみて』という部分について、特に先生方と話をすることが多かった。今年度も残り3か月。この3か月は、頑張ってきてくださった先生方の取組のおかげで、子どもたちがどう変わってきているのか、先生方が『実感』できるような一手を考えていきたい。

※共走：造語。相談したり助け合ったりしながら前に進んでいくことを表現した言葉。

子どもも教師も「自分事」で学び続ける

学校改革マネジメントコース1年/福井市松本小学校 出口 津代子

11月28日(木)、「第1回松本フェスティバル」が無事終了した。4月に着任し、早々に児童の様子を全職員で語り合い、見えてきた課題を共有のものとし、そこを核としたスクールプランを作成した。中に織り込まれた学校教育目標や松本っ子につけたい5つの力は、みんなで語り合って創り上げたという、温

かい血が通ったものとなった。だからこそ「学校教育目標を達成するための授業は、特別活動は、行事はどうあるべきか」と、つけたい5つの力を常に意識し、カリキュラムマネジメントの視点も加えつつ、省察しながら進めようとする力強い流れが、職員室に生まれてきたと感じている。

これは、11月カンファレンスでファシリテーターの清川卓二先生がおっしゃった「『共感性』で全体の課題を共有する。『相互理解』でベクトルをそろえる。それが『感動』体験につながっていく」に、職員室が生まれ変わってきているのだと、大きな気づきを得ることができた。

松フェスを一つの軸として展開した教育活動では、①子どもも教師も、自分事ととらえて活動する②子どもも教師も、過程を大事にする③子どもも教師も同じ立ち位置。ゼロから創り上げる、とことん語り合う、失敗を恐れない(そもそも失敗とはならない)④子どもも教師も、自分事で創り出したからこそ、自分事で振り返り、自分事で次に生かす(ことにつながっていく)を大事にしようと、児童・教職員に伝え続け、実際に動き始めた。縦割り活動班では「松フェス開催に向けて必要な係は何か」を児童主体で決め、当日に向けて取り組んだ。学年活動では「これまでに身につけた力で、何を表現したいか」をとことん話し合っって児童が決め、当日は、「生活科」「図画工作」「音楽」「体育」「総合的な学習」「国語」など、様々な教科・領域でつけた力を存分に発揮していた。教師はその過程で、カリマネを意識しながら取り組むことを、実際に体感することができた。教師も「学び続けた」のだ。

だが何より、教師が子どもの育ちの「過程」を大事にすることを意識しながら取り組んだことは、とても大きな収穫となったと感じる。やはりそれは、これまで何回も聞いている「子どもと大人の学びは相似形」にある。つまり、大人が「過程」を大事にしていけば、それは子どもが「過程」を大事にしていくことにきつとつながると思うのだ。逆に言えば、大人がそうならない限り、子どもがそうなることは絶対にと言えない。今回の経験を、明日からの日々の教育

活動につなげたい。今現在は、子どもも教師もそれぞれの立場から活動を振り返り、省察を進めているところである。

このように「チャレンジする。変化：チェンジを恐れない」学校経営にあたっているが、そんな今の私を支えているものは、教職大学院での学びだ。

昨年度夏期集中で出会った著書『コミュニティ・オブ・プラクティス』に書かれていた「実践するコミュニティの7原則」は、今も私の精神的支柱となっている。特に「進化を前提とした設計を行う」「内部と外部それぞれの視点を取り入れる」「様々なレベルの参加を奨励する」「価値に焦点を当てる」「親近感と刺激を組み合わせる」「コミュニティのリズムを生み出す」は、現在のささやかな営みの中の具体的なシーンを思い出し、「これに当てはまるなあ」と勝手に思い込んで納得している私がいる。

また、今年度夏季集中で出会った著書『学習する組織』からは「創造的緊張(ビジョンと今の現実との乖離)に熟達すれば、『失敗』に対する見方も一変する。失敗とは、単なる不足、ビジョンと今の現実との間に乖離があることを示すものにすぎない。失敗は学びのチャンスでもある。現実の把握が不正確であることについて、期待したほどうまくいかなかった戦略について、ビジョンの明瞭さについて、学ぶチャンスなのだ。失敗したからといって、その人に価値がないとか、無能だということにはならない」という力強い言葉をもらい、4月からの営みに対する省察を「学びのチャンス」ととらえる職員室がある。

教職大学院の院生の皆様と一緒にもがきながら(!?)も学びや気づきが満載の営みを大事にしつつ、残りわずかとなった日々を大切に、かみしめて過ごしていきたい。



合同カンファレンス 報告

クラスによって子どもの色が違う

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井市中藤小学校 伊達 あさひ

11 月月間カンファレンスの午前のセッションは、「他校の研究から学び、他校の研究を支える」であった。私は明新小学校をインターン先にしての院生の授業と、去年のメンターの授業を見た。去年のメンターは今私がいる中藤小学校ではなく、立待小学校に異動した先生である。そのためありがたいことに、M1、M2 の中藤で見ている子ども、明新小学校での子ども、現在、去年のメンターがいる立待小学校での子どもの 4 つの異なる環境の中にいる子どもたちを見ることができた。比べてみた際に思ったことは、子どもたちの色がそれぞれ違うということであった。子どもたちの色というのは、クラスの雰囲気や子ども一人一人の授業を受ける態度、子どもたち同士の関わり合いであると思う。教師は教師でどのように子どもを育てたいのか、そのゴールが違うということが子どもたちを見て分かった。それぞれ 4 つの場所にいる子どもたちを見てみると、授業中の様子や休み時間の様子などで雰囲気や子ども同士の関係なども全然違って見えた。例えば授業中を例に挙げる。授業中に子どもたち同士での教え合いが中心の授業と分からない子どもがいると自分で考える時間を持たせるのではなく、教師に教えてもらっている授業である。そのため、話し合いが活発になっていくため、授業中の教室の雰囲気も良くなっているように見える。一方子どもたちに考える時間を持たせるのではなく、教師が分からない子どもたちの所へ行き、進める授業は授業で良さがあると感じた。問題を解けている子どもは次に進めることができ、教えてもらっている子どもは子どもで、1対1で見てもらえる点であると思う。一番子どもたちの色が出ている所が分かる場所があると思う。それは、子どもと教師の関係性であると思う。休み時間に教師とのコミュニケーションをしていたり、教師に駆け寄って行

ったりする子どもたちを見るとクラスとして良い雰囲気であり、一人一人が教師を信頼しているということが分かる。このようにたくさんのことが分かったのは他校での学びがあったからである。他校からいろんな気づきをすることができたため、すごく良かった。

午後のセッションでは、「自分自身の実践の挑戦を語る」ということで長期実践報告書をどのように書いていくか、書いている上で何に悩み、行き詰っているかを話していった。私はインターンに行く中で学級経営に興味を持つようになった。また、2年続けて6年生を見させていただいているため、どうしても今年と去年を比較して見てしまう。比較する中で自分が勉強になっていることがほとんどであるが、その中でもなぜそのような支援をしているのだろうと疑問ではないが、少しモヤモヤすることもあったということ話をした。そこでファシリテーターをさせていただいた前田先生が、なぜ学級経営に興味を持ったのかの理由、なぜモヤモヤするのかその部分を書いていくと良いというアドバイスをいただいた。このことから、なぜそう思ったのか、なぜそれに興味を持ったのか、自分の持っている気持ちや感情が出てきているのはなぜなのか、その原点を書いていくことで、考察が深まっていくということに気づいた。自分の気持ちや感情を自分で分析することはすごく難しいことであると思う。なぜなら、自分の気持ちや感情の変化に自分で気づかないといけないからである。また、なぜこの時このようなことを思っていたのか自問自答しなければならない。一見簡単そうに見えてそうではない。しかし、自分と向き合う時間はこれまでなかったため、私にとってプラスになると思うが、苦しい時間になるとも思う。これから行き詰まる

ことが何度もあると思うが、それでも少しでも良い長期実践報告書が書けるように妥協はせずに完成させたいと思う。

他校から何を学ぶのか

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井市明新小学校 滝波 もも加

11月の月間カンファレンスでは、他校の研究から学びを得ることの目的について語り合った。グループのメンバーで考えたところ、他校自身が教育を通して目指す子供の姿、他校の教育観そのものを知るために、私たちは他校へ行くのだという結論に至った。その答えに至った経緯を以下に記していく。

私は初め、この問いに対して、「新しい視点を得るため。」と答えを出した。新しい視点を得ることで、自分に至らない点やそれに対する改善点などが明確化されるため、他校へ行くのだという考えだったが、新しい視点とはどのような視点か、そこまで深く考えたことが今までなかったため、この問いに対して具体的な答えを出すことが初めは出来なかった。

語り合いの中で、他校の授業を参観した際に、何を記録し、同じコミュニティに属する仲間と参観の後、何を共有し、自分の実践にどのようにつなげていくのかを具体的に考える場面があった。私は、他校へ行った際に、子供の姿とそれに対する教師の教育方法(授業スキルなど)を記録していた。しかし、私はいつも、新しい視点を得ることで生まれる充実感よりも、どうしてこのような姿になるのかという疑問がたくさん生まれていた。おそらく、その疑問が浮かぶ時点で、自分自身の学校にいる子供たちにこのような姿になってもらうためには教師としてどうすればいいのか。と、自分事として考えていたからだと感じる。他校から学んだ教師の手法をそのまま真似をしても上手いかわからないことを感覚的に理解できていたからこそその疑問なのだと分かった。そのため、同じ

仲間へ参観後に共有する時も、自然と他校の子供の姿や他校の教育観を話していた。私自身の今までの無意識な行動に意味があったということに、この語り合いで気付くことができた。

目の前の子供が変われば、教育方法も変わり、その方法はその子供たちの一番近くにいる教師が考える必要がある。そして、他校の研究から学びを得ることの目的は、教師の教育方法を知ることではなく、その学校が目指す子供の姿、教育観を知ることだと語り合いの中で答えが出た。もちろん、他校から学ぶ意義は人それぞれであり、この答えは一意見である。そして現場での経験が少ない私は、教師の教育方法も学ぶ必要がある。自分の武器を増やしていく感覚で学んでいかなければいけない。しかし、そこで学んだ方法を自分の実践に取り入れる際に、時間が無いことを理由に考えることをさぼり、そのまま取り入れてはいけない。目の前の子供たちに適切な方法を考えながら実践に取り入れていこうと改めて感じた。そして、どのような子供たちに育ててほしいのか、その軸をしっかり持つべきだと感じた。

この語り合いの中で、私の今までの言動を客観的に見てくださる先生方からのご意見が、新たな自己理解に繋がった。一人で考えるよりも、たくさんの方々と同じ目線に立ち、お互いを尊重しながら語り合いを行う方が、何倍も学びがあるということを感じていくことができた。ここでの学びを次に繋げていきたい。

他校の実践に触れる中で

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程

金田 潤之介

〇はじめに

私は11月1月間が担当であるが、札幌にある藻岩高校への見学や結婚式等がかぶってしまったため参加することが出来なかった。そのため、下記には話し合い等は出てこない。しかし、私が参加した藻岩高校についてと、他校から学ぶことの価値について私なりに記載しようと思う。

〇藻岩高校での探究発表会

私は11月15日に北海道にある藻岩高校へ行き、探究発表会を参観させていただいた。藻岩高校を知った経緯としては、2024年の2月にあったラウンドテーブルにて藻岩高校の先生と同じグループとなったことがきっかけである。そして、その実践にとっても興味を持ち、個人的に伺いたいとお願いし、探究発表会に参加させていただいた。

発表会では、それぞれ20チームが発表しており、どの班もとても実践への解像度が高く、自分の経験を発表しているということがとても印象的であった。探究のサイクルとしては3つにわけられており、期間は半年程であった。藻岩高校は独自で地域と密接に探究を行っており、1つ目のサイクルでは自分のやりたいことと、地域の問題事や関心を知る時間。そして2つ目のサイクルでは実際にその場所に行ってみてグループ独自の活動を実践する時間。3つ目は実践を発表するための時間として取られていた。しかし、発表の内容を聞いてみると、2つ目のサイクル中に失敗を見つけ、その改善のために仮説を立て、もう一度実践を行っていた。そのため、子供達の言葉には確かな実感と重みがあった。特に、ある班の発表で出た「私がやりたいことをしただけなのに、周りの人達がとても喜んでくれた」「私たちだけではできなかった。先生や関わった人たちの助けのおかげでできた」という言葉にはとても探究の価値を感じた。

では、なぜそのように子供達は感じられたのだろうか？私は藻岩高校での発表を見ていて子供達に実感させることを大切にしていると感じた。例えば、探究のスタートでは地域の人たちが体育館の中で企業説明会のようなブースを設置し、実物を触って体験できるようになっていた。それにより、子供達が「実際に自分もこういうことをやってみたい」ということを思ったのではないかと。他にも探究発表会の終わりにあった今回の探究に携わった動物園の副園長さんのお話の中で「皆さんの今回の探究はこれで一度閉じますが、私たちの班でやった蝦夷鹿の一部を使ったストラップについては園の方でこれから作っていくことに決まりました」と言っており、自分たちの活動に価値を見出してもらえたと感じたのではないだろうか。

本発表会に参加するまで私は見学する校種が高校であり来年からは小学校であるため、参考にするのは難しいだろうと思っていた。しかし、本当に学ぶことが多かった。今回見た子どもの姿は探究の価値を自分達の経験から見出していた。自分がただ面白いという理由で没頭するのではなく、自分と向き合い、自分を通して何かを見ていく。このことがとても大切ではないだろうか。

〇他校から学ぶということ

私は今回の学校見学によってさまざまな見方を得ることが出来た。それは自分達が普段かかわっている子供の姿・指導観・経験を基に、見学先の学校の子供達・カリキュラムを見据えるからだと思う。そのため、学校見学は自分との違いや自分のできている部分の実感を持ち、自分が関わっている子供達に「これからこうしてあげたい。」「もっとこういうことが出来るかもしれない。」という気持ちを高めることが出来ると思う。ただまねるのではなく、自分たちの学

校の特色や特徴を活かしてかしていくことで、子供達によりよい「カリキュラム」「学びの場」を提供できるだろうと思った。

自分の変容に気が付く

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井県立科学技術高等学校 松田 美穂子

大学院での時間は過ぎるのが早く、気が付いたら12月になっていた。月間合同カンファレンスは、様々な先生方と語り聴き合えるからこそ、特に学びが多く、残り僅かな時間を大切にしていきたいと強く感じた。今回のカンファレンスでは、他校の公開研究会からの学び、自身の長期実践研究報告書に向けた構想について、語り聴き合った。

まず、他校の研究からの学びでは、安居中学校の公開研究会について話させていただいた。3年生の理科で、担当の先生は、入念に教材教具の準備をされており、生徒らは、とても楽しそうに学んでいる様子が見受けられた。しかし、この授業をカンファレンスで報告する際に、どう報告すれば良いか分からなくなった。安居中学校の先生を含め、どの先生の授業も、とても魅力的で、凄い授業に感じるため、事実のみの報告になってしまうからだ。そのことも、同じグループの先生方に話しながら報告し、検討を行った。グループの先生方のお話を聴き、それぞれの授業者に、それぞれの思いがあるからこそ、どの先生の授業も魅力的に感じるのだと気が付いた。

今までの私であれば、理科など教科に関する知識や技能がしっかりと身に付いているか、深い学びがあったかという視点で授業を見ていることが多かった。特に学部生の時は、知識や技能の身に付き具合で良い授業、良くない授業を判断し、授業改善を行っていた。しかし、今は教科の知識や技能だけではなく、それに加えて、主体性の面はどうか、協働的な学びの面ではどうかなどの視点で授業を見ているため、どのように授業を検討すれば良いのか分からなくなっていた。今回のカンファレンスで、授業者の思いを含

めた“目指している生徒の姿に到達できる授業であったか”という視点で、生徒の姿を見取することで、授業の検討ができ、授業の改善に繋がるのだと感じた。私の授業参観の視点が変容したこと、変容したことに気が付いたことは、この2年間の大きな成長だと思った。

そして、長期実践研究報告書の構想についての語り合いでは、語り合いから自分の授業作りの原点を考えることができた。構想の語り合いといっても、何を話せば良いのか分からなかったが、とりあえず現段階で構想していること、具体的に何を書けば良いのか、筋は通っているのかなど、悩んでいることを話させていただいた。言葉にしながらい、他者に聴いてもらい、「具体的に実践内容を知りたい」「どうして、そう考えたのか知りたい」「なんで変化したのか知りたい」といった声を聴けたことで、具体的に何を書けばいいのか少し見えてきた気がした。特に、私は眠たくない授業がしたいということを話したときに「どうして？」と聞かれて、しっかりと言語化したことがなかったことに気が付いた。なぜ眠たくなりたい授業をしたのかは、きっと私の授業づくりの原点であり、2年間の授業実践に関わっていて、必ず省察する必要がある部分であると思う。言葉にして他者と話すことで、パソコンに向かって文字を入力するだけでは気が付かないことに気が付くことができた。また、思いや筋もしっかりしているから、執筆する中で逸れていかなないように気を付けていくと良いと助言をいただけ、少し安心することができた。

今回のカンファレンスを通して、他校から学ぶことは非常に多いと感じた。私たち教員は、他校から刺

激を受け、その刺激がいい学びに繋がっているのだと考える。また、私たちが他校へ出向くことで、他校を支えていることにもつながっており、他者からの新しい視点が他校を支えている。実際に安居中学校、その他の学校に行つてそのように感じた。

また、長期実践研究報告として記録を残すことで、自分の学びの質を向上させるとともに、他者の研究を支える一資料になるかもしれない。私自身や他者の時間、時代を超えた研究や学びの資料となれるように、しっかりと省察をしながら執筆していきたい。

語り合うことの可能性

授業研究・教職専門性開発コース3年/福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程

渡辺 昇希

私はこれまでの月間カンファレンスを通して「語り合うこと」の大事さを改めて感じた。

今回も現職の先生方と同じテーブルについて他校から学ぶことをテーマに語り合いをさせていただいた。何が正しいのかという「討論」をするのではなく他者の意見や考えを取り入れあう「語り合い」をすることで行き詰る自身の実践に対して新たなヒントを得ることができる。他者に向けて発信することで自ずと自分の実践を省察することができる。どの先生も語り合うことの大切さを口にする。

金曜カンファレンス、月間カンファレンスで語り合われることは人によって本当に多種多様である。一週間または1ヶ月での自分なりの学び、自分の実践について悩んだこと、最近の自分の話題…しかし他の話し合いとは違って自分のことを包み隠さず何でも話し合えることに「語り合い」の良さがある。私はこのような語り合いについて初めは嫌いだった。私は教育について何も分からず、何が分からないのかも分からなかった人だった。なので語り合いをすればするほど周りの先輩や同期は何やらすごそうな実践をしているように聞こえた。だからカンファレンスでは自分のことは何も話したくなかった。1週間の中で、1ヶ月の中で私は何も成長していないように思っていた。そのことを金曜カンファレンスで打ち明けてみると当時の先輩から「自分たちが何事にも知らず知らずのうちに『正解』を求めてしまっている。ありのままの自分を『認める』ことが大事だよ」とコ

メントをいただいた。それ以降私は自分に対して卑屈になることをやめ自分はこの教職大学院でどんなことを学びたかったのか、私はどんな教員を目指していたのかを見直し、少しずつ学びをつかんでいった。

私はこれまで金曜カンファレンスや月間カンファレンス、そしてラウンドテーブルでいろんな院生や先生方と同じ机で語り合わせていただく機会が多く、語り合うということは正直当たり前前の感覚にあった。しかし非常勤講師をするようになってそれは当たり前前ではないことに驚いた。私の非常勤講師先の学校は10年目、15年目と長い間同じ学校に勤めている先生が何人もいらっしゃる学校であった。その学校の先生は授業に部活動の顧問と自分の仕事をこなすことに忙しく、語り合いの場など存在しなかった。教科会でも職員会議でも業務連絡の内容が多く本音で話し合う機会が少ないように感じた。

非常勤先の学校には同じく教職大学院に通われている先生がいらっしゃる。その先生は学校がよりよくなるように先生方同士で語り合える場を設けるように精を出していらっしゃった。初めは出席される先生は本当にわずかであった。しかし回を重ねるごとに出席される先生も多くなっていった。中には私の両親の年齢くらいの先生もいらっしゃった。そんな先生が「この学校は良くも悪くも変わらない。自分でも変えていきたいとは思いますが、自分一人ではどうにもならない。どうしたらいいのか…」と話し出す。

他の先生方も学校に対して正直な気持ちが飛び交う。私は正直このようなベテランの先生方が学校についてそのように思っていたなんて全く想像していなかった。失礼ではあるがどの学校もベテランの先生方って頭もお固くなってるだろうし、現状維持を望む人が多いのかなあと思い込んでいたところがあった。私は当初ベテランの先生方に対して近寄りたがたい印象があったが、このような語り合いの場があることでその印象は次第になくなっていった。

語り合いには自分の実践に対する新たなヒントが得られるだけでなく、お互いの本音を知ることができ新たな関係の構築をするといった複数の可能性があるのだと私は教職大学院の生活を通じて感じた。場所にもよるが、語り合いの場所があることが普通ではないところはまだまだたくさんあるのかもしれない。私も教員になったら授業研究のこと、学級のこと、他の先生方にも積極的に話しかけることを心がけていきたい。

外国人児童生徒のための「にほんご多読」

ミドルリーダー養成コース1年/越前市武生第一中学校

Tiago Pereira dos Santos

昨年の今頃、私は福井大学教職開発大学院の入学を検討していました。ブラジルのサンパウロ大学を約10年前に卒業して以来、長い間大学生活を離れていた私にとって、これは久々の学びへの復帰となります。また、初めて母国を離れ、外国語で学ぶ経験もありました。

本大学院に入学してから半年以上が経過しました。福井大学での月間カンファレンスで英語や時には日本語で発表を行い、レポートの作成などは挑戦の連続ですが、定期的な話し合いを通じて、他の院生から新たな視点を得て、色々学ぶことができます。さらに、カンファレンス後にレポートの作成を通じて、自分の実践を新たな視点で振り返ることから、新たな発見をすることもあります。

今年4月以降、大学院で何に焦点を当てるべきかについて絶えず考えていました。越前市で7年以上にわたり外国にルーツを持つ児童生徒と関わってきた中で、市内の小学校・中学校からこういった生徒たちへの支援方法の進化が見られました。日本の学校における外国人児童生徒および外国にルーツを持つ児童生徒の教育を広い視野で考えると、研究の焦点となり得る課題は数多くあります。しかし、熟考の末、

自分自身の学校での実践に密接に関連する課題に焦点を当てることを決めました。

日本語指導が必要とする生徒のため、毎日複数の学校を巡回していますが、一人一人との時間は非常に短く、計画した課題に取り組む時間が十分に取れないことが多いです。その生徒たちの言語習得プロセスをより良く支えてあげたいという思いから、私は教室の外でも学びを促進する方法を探ることに力を入れることにしました。

近年小中学校では、すべての児童生徒が学校から提供されたタブレット端末を持っているようになりました。最初私は生徒たちがタブレットを効果的に活用できるよう、日本語学習者向けのアプリやウェブサイトなどを紹介しました。そして、過去にレベル別を用いた多読の自分の経験をもとに、簡単なものから日本語で本を読もう「にほんご多読」という新しいプロジェクトを学校で始めました。

教職大学院の先生方や院生の意見や感想を聞きながら、このプロジェクトの初期形態を開発し、二学期よりいくつかの学校で実施しています。越前市武生第一中学校の国際交流教室に約250冊の本を備えた図書コーナーを設置し、無料で利用可能な400冊以上の多読用デジタル本にアクセスできるウェブサ

イトを作成しました。このプロジェクトは、生徒たちが本にアクセスできる環境を整えるだけでなく、生徒の関心を高めたり、他校の生徒と交流できるようなシステム工夫も含んでいます。

11月の月間カンファレンスで「にほんご多読」と今私が向かっている課題について話したら、たくさ

ん励ましの言葉をいただきました。このプロジェクトが成長し、将来に多くの学校で、多くの生徒に活用されることを願っています。「にほんご多読」ホームページは開発中ですが、下記 URL からアクセス可能です。

<https://sites.google.com/view/nihongobooks/home>

11月カンファレンスを終えて

ミドルリーダー養成コース2年/福井県立若狭高等学校 澤田 更紗

11月のカンファレンスは、嶺南会場として若狭高校で行われ、教職大学院にいらっしゃる嶺南の先生方だけでなく、教職大学院を卒業された先生方、また、若狭高校の数名の先生方も参加してカンファレンスが行われた。福井大学に行くことが息抜きになっている部分もあるので、カンファレンス参加前は仕事と変わらない環境でのカンファレンスに少し残念さも感じていたが、参加してみると、嶺南会場の良さを感じられるカンファレンスだった。

清川先生が、嶺南会場の意義として、「嶺南の院生同士の結びつきをより強いものにすること」「コミュニティだけでなく、教員同士のネットワークを作ること」だとおっしゃっていたが、まさに今回のカンファレンスはその機会であることを実感した。特に、私が初めに参加したグループは、敦賀市教育委員会の指導主事をされている松永先生と、私と、若狭高校から参加された2名の先生方だった。松永先生の多彩な経歴や、学校の変容をみとり研究をされているお話について、とても興味深く聞かせていただいた。その後これまで同僚として働いていた2人の先生方の自己紹介やお話を聞いて、思っているより知らないことが沢山あるということを改めて実感した。普段こうしてゆっくりと対話を行う時間もなく、初めてそれぞれの先生方が「これまでどのようなお仕事をされてきたか」や、「今何を思って学校での仕事に取り組んでいるのか」について知ることができた。同じ学校で働いていても、対話を通して見えてくるそ

の人はまた違うということが改めてわかり、それぞれの先生が生徒のことを考えながら日々実践に取り組んでいらっしゃることを実感した。

若狭高校では、対話の研究に取り組んでおり、その中で p4c (子どものための哲学対話) にも取り組んでいる。p4c はもともと多様な背景を持つ人々が生活するハワイで、ハワイ大学とその周辺の学校の先生たちによって学校の中で広がってきた。その p4c に先進的に取り組むワイキキ小学校のナネット先生が「p4c では安全な空間でその人を知ることができる」ということをおっしゃっていた。教職大学院のカンファレンスも、まさに安全な空間で対話を通して他者を知り、自分の考えを広げたり、そこで考えたことを次の自分の行動にも繋げたりすることができる時間だと感じている。

教職大学院に入学し2年目を迎え、いかにしてコミュニティを作っていくべきかを考える機会が増えている。今回のカンファレンスで、同じ学校の先生と話す機会があったことで、「教科をまたいで一緒に取り組むことができるのではないかと」言っていたのがとても嬉しかった。もっと学校内で生徒について対話する時間があると、より良いコミュニティを作っていけるのではないかとこのカンファレンスで感じた。

また、今回のカンファレンスでは、奈良女子大学附属幼稚園での研修の取り組みや、教職大学院を卒業した高浜町立和田保育所の岡山先生から、園をま

たいでのコミュニティを作ってきたことについても聞きした。本校の海洋科学科で、教職大学院1年目の小畑先生は、保護者を含めた地域のコミュニティについても考えているとお話されていた。今回のカンファレンスのテーマは「他校の実践を支える」だったが、学校の外や地域の他の園にも目を向けている先生方のお話を聞き、より自分の視野を広げていただけだ。

まずは学校内のコミュニティを作り、それをどんどん広げていくことに取り組んでいきたいと新たに考えることができたカンファレンスだった。また、嶺南での開催ということで、嶺南の先生とのネットワークを広げ、嶺南のコミュニティの在り方についても考える時間になった。

「Why」を語る、「観」を捉え直す

ミドルリーダー養成コース2年/札幌新陽高等学校 号刀 悠貴

頭の中には、常に長期実践報告書がある。諸先輩方が書いた素晴らしい報告書を読めば読むほど、「自分に書けるのだろうか」と考えてしまう。何をしても頭から離れない。そして11月のカンファレンスを迎えた。

今回のカンファレンスでは、奈良拠点校で一緒にさせてもらっている宍戸先生の実践報告が冒頭にあった。「他校の実践に学ぶ、他校の実践を支える」をテーマとし、幼稚園で行った研修が他校をどのように支えているのか、あるいは他校の先生たちからどのように学びを得ているのかを語ってくれていた。

宍戸先生は話をしていて、「他園、他校のために双方向的な学びを作りたい。そもそも、幼児教育に絞っていいのかわかるか？」

幼児教育の中だけではなく、あるいは高校教育だけでなく、「異質」であるからこそ根源的・本質的な問いが生まれる。宍戸先生自身が、小学校の教員も経験した上で、幼児教育の世界に入った時に「小学校は・・・」、「幼稚園は・・・」と分けて話すことが多かったそうだ。しかし、彼女が教職大学院の中で聞いてきた高校教育の実践の話は、違う世界だと思っていたことが、実は根源は同じだったのだ。

実践の How について話すことは、職種や学校によって内容は異なる。しかし、Why についてはどこにおいても重なる部分がある。その重なる部分について、

異質者同士で語り合うことで、自身の実践の本質に気付くことができる。

だからこそ、これまで行われていた夏の奈良女子大学附属幼稚園の研修では、職種が異なることはもちろんのこと、全国から先生たちが集まっている。

異質者がいることにより、語る事が難しくなる。同僚や同職種の前提がないからだ。その前提から語ることで、その人自身の教育観が再構成される。

宍戸先生の実践を聞くことで、「他校の実践に学ぶ、他校の実践を支える」というのは、他校の実践から How を学ぶことや、自身の実践を伝えるのではなく、学校や職種を超えた異質者が出会い、Why を語ることが、互いの実践を支えていると学んだ。

加えて、長期実践報告書を書くことについて学んだ。長期実践報告書とは、教師として働いてきた過程で、どのように自身の「観」が変化してきたのかを書くものだ。ものの見方や感じ方がどう変化してきたのか。それがすなわちどのようにして現在の「私」になったのかを振り返ることで、次の発達に向けて進むための錨を手に入れることができる。

教職大学院の先輩であり、現札幌教育委員会の西野先生から、長期実践報告書についてお話を頂いたことがある。

「長期実践報告書は、書いたらそれは机の引き出しに入れて、もう出てこないものだと思っていた。し

かし、今でも時々読むことがある。自分が何を大切にしていたのだろうと確認することがある」

これからも実践を積み重ねていく際に、気づけばHowにばかり気にとられ、Whyを十分に深掘りできないこともあるかもしれない。直感でばかり、物事を判断することもあるかもしれない。しかし、長期実践報告書という錨があれば、自分が何を大切にしてきたのか、立ち戻ることができる。「観」を何度でも捉え直すことができる。

教師としての器を作り直し、今後も成長していくために長期実践報告書の必要性を学ぶことができた。

しかし書くことは難しい。重要性や書く意味を理解したことと、書けるようになることが別である。実践をどのようにしたのか、ばかりを記述している。その実践の土台である「観」がどのような物だったのか。そして生徒や同僚の「語り」からどのように揺さぶられ、拡張・刷新したのかを書けていない。モノローグな文章で、情景が浮かんでくる文章ではない。ここを残りの学生生活で突き詰めていく。

語り合う意味・学び合う意味とは

学校改革マネジメントコース1年(1年履修)/敦賀市立栗野中学校 中川 恵一

少し雪の混じる師走12月初旬、先月のカンファレンスの内容を思い出しながら執筆している。「11月のカンファレンスは、『他校の研究から学ぶ経験、他校の研究を支える経験を語り合う』からスタートだったな…」と再度、提出したレポートと年間スケジュールを確認すると、「合同カンファレンス」は、11月が最後であることに改めて気付かされた。「1年間じっくりと…」と思い、臨んだ、4月最初のカンファレンスから、11月最後のカンファレンスまで本当にあっという間だったように感じる。同時に、「いよいよ終わりが近づいているのか。」と卒業を間近に控える中学3年生のような心境になった。そこで、「語り合う意味・学び合う意味とは」と題し、11月カンファレンスの学びとともに、1年間の「カンファレンス」で感じたこと、そして学んだことも一緒に述べていこうと考える。

11月のカンファレンスでは、3人の先生方と主に①学校の魅力とそのマネジメントについて、②児童生徒の変化とその変化を継続させるためのマネジメントについて、③学校・教室内についての秩序について、の3点について深く議論することができた。特に、各先生の具体的な実践とその背景にある教育観を共有できたことが、私にとって大きな収穫だった。実践

から教育観を読み解き、互いの教育観を比較検討することで、教育に対する理解を深めることができた。

(後ほど、その価値について、述べようと思うが、実践からその方が持つ「教育観」を知り、その教育観を皮切りに、互いの教育観について語り合うことこそカンファレンスの意義だと感じている。)

ある先生は、「その学校の魅力とは何かを考えることで、それを維持・発展させるためのマネジメントが生まれる。では、その魅力は、あなたのご子息をその学校に通わせたいと思える魅力と言えるのか。」と問いかけられた。この問いかけは、私にとって非常に深いものだった。その考え方を軸に児童生徒の変化のベクトルやその評価について、また、学校・教室の秩序とは何かを考えると、おのずと進むべき方向は見えてくるのではないかと感じた。

11月合同カンファレンスはもちろん、私にとってカンファレンスとは、教育観に関しての自己開示の場であった。また、自己開示をしていただける参加者同士で語り合う場であったと感じている。教育という軸は共通しているものの、4月当初、正直、初対面での教育観の開示は難しいなと感じることもあった。なぜなら、私の実践や取組の後ろには私の考えや思いが少なからず影響しており、実践や取組を語ると

いうことは、それらそのものを語るのではなく、それらの中心にある私の教育観を語っていると考えるからである。初対面かつ多種多様なカンファレンス参加者に自分の未熟な考えや思いを、そして教育観を開示するのは難しい、いや発展途上のため開示できるものではないという方が正しいのかもしれない。他の参加者の素晴らしい実践や取組を聞かせていただく度に、「私が語るよりも、みなさんの語りが聞きたい」と感じることもあった。しかし、カンファレンスを重ねる度に、私の実践や取組に、教育観の語りに、様々な角度から価値づけを行っていただけるとともに、そこから派生して、多くの知見を、教育に対する思いを参加者全員で共有することができたと感じることもあった。それに伴い、「参加者が語られる実践や取組の後ろに見える、教育観についてお聞きした

い」という思いが強くなった。「語る、聞くという一方通行ではなく、ひとつのことについて、互いに語り合うことに意味があるのだということ。また、開示した・開示された教育観を基に、再度、互いの教育観を語り合い、広く深く教育を捉えることができるようになることに意味があるのだということ。そこには、能動的な『学び』に加えて、『学び合う』が存在するのではないかと感じるようになった。まだまだ、初対面での自己開示に抵抗は残るものの、その語り合う・学び合うことの意味に気付けたこと、それらに価値を置けるようになったこと、月間カンファレンスに参加して本当に良かったと感じていることのひとつである。さらに今後、この「良かった」という気持ちを拡散しその価値を共有していく中で、さらに語り合う意味・学び合う意味を深めていきたいと思う。

11月合同カンファレンスを振り返る

学校改革マネジメントコース1年(1年履修)/大野市開成中学校 増田 善宏

「他校の研究から学ぶこと、他校の研究を支えることの意味」の話題提供では、奈良女子大学附属幼稚園の宍戸佳央理先生の実践を聴いた。宍戸先生の実践で印象に残ったところは、「語り合う文化の醸成」である。宍戸先生は、短時間で勤務されている職員の方と対話をしていないのではないかとということで、保育後の15分間の対話の場D. D. (Daily Dialogue)を実践されている。「語り合う」ことの効果として、次の4点を挙げられていた。

- ①語る身体をつくる
- ②互いに理解し、ケアする場
- ③子どもを多面的に理解する場
- ④実践の意味を問う

現任校では、サポートルーム等で教室に入れない生徒や普通教室で学習に困難を抱えている生徒の支援を行っている教育支援員や校内サポートルーム支援員との打合せ会を、私教頭自身がファシリテータ

ーとなり、毎週木曜日の4校時に実施している。打合せ会の目的は、生徒の情報共有である。支援員が互いに生徒の見取りを語り合うことにより、生徒の新たな一面を発見するなど、多面的に理解する場になっている。また、支援員が生徒と関わるなかで生じた悩みを語り合うなど、支援員が互いに語り合うことで、悩みを理解し合い、心をケアする場にもなっていることも感じた。

それを受けてのグループセッションでは、福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程でインターシップとして取り組んでいる帯川夏穂先生から、福井市安居中学校の公開研究会の話題が提供された。その話題の中で印象に残ったのは「マイラーニング」の取組である。「マイラーニング」とは、教科学習や総合的な学習の時間、特別活動などで「何を学んだか」「自分がどう変わったか」ということを、異学年の小グループやポスターセッションで発表・交流するものである。生徒は、学校生活や日常生活に密着したテ

ーマを設定し、成功体験ばかりでなく、失敗や悩み、再起に向けた工夫・改善した取組について語っていた生徒の姿に、生徒の自己肯定感の高さを感じた。また、この取組は生徒自身の課題探究をロングスパンで進めており、生徒一人一人の自律的な学びの姿や成長のプロセスが感じられる素晴らしい実践であり、挑戦したいと感じた。

また、中藤小学校でインターシップとして取り組んでいる水野敬太先生からは、福井市松本小学校の公開研究会の話題が提供された。1年算数の「かたちづくり」の単元で、まずは子ども自らに考えをもたせるため個別で考えさせ、ペアや4人でのグループ学習を行うことで友達の異なる視点が導入されることで新たな考えに気づいたり、友達に触発を受けて新しいアイデアが浮かんだりする場面が見られたようであった。ペア・グループ学習など「学び合い」学習は、子どもたちの学びを深めて互いに高め合うなど教育効果が期待される。教育効果を高めるためにも、子どもたちに自分の考えをもととする態度を育成したり、学習集団の望ましい風土づくりを進めたりすることの重要性に再認識した。

「自分自身の実践の挑戦を語る」のグループセッションでは、岐阜聖徳学園大学附属小学校の山田亜都子先生から、校長から学年主任をまとめる役割を任せられ、定期的に学校教育目標をもとに作成された子どもに育ってほしい姿について話し合う機会を設

定しているという話題提供があった。校長が教員からの意見を収集するためや、学年主任を育成して担任の力量アップを目的に、山田先生に与えた役割のようである。学年主任のみが集まる機会を設けている取組はユニークだと思った。また、私立学校であるため教員の異動交流がなく教職員の力量アップが難しいことや、教員が互いに他の学級に干渉し合うことない「学級王国」のような状態になっていることを話されていた。私は、教員が互いに他の学級に干渉し合うことがないことに対して、現任校の「ローテーション道徳」の取組を紹介した。「ローテーション道徳」とは、学級担任だけではなく、学年担当教員が交代で学年の全学級を回って道徳授業を行う取組である。この取組を効果として、教員同士の道徳に関する話し合いも増えていることや、学級担任に空き時間が生まれ、他の教員の授業を参観する場面なども見られるようになった点が挙げられる。

同志社中学校の田畑彰子先生からは、教員の異動交流がないことにより刺激が少なく、学び合う研修会を企画しても参加しない教員が一定数いることや、教員が同一学年の複数クラスを担当するシステムである「ヨコ持ち」を実施していることで他学年に関わることが少ないことについて悩みを話されていた。福井県では、教員が3学年全てで教科を担当するシステム「タテ持ち」を行っており、教員間のつながりや協働性の豊かさにつながっていると感じた。

主体的な学びが目覚めるとき

～未来を切りひらく学び、それを生み出すコミュニティ～

学校改革マネジメントコース1年/埼玉県立小川高等学校 岡本 敏明

11月東京サテライトでは、福井大学連合教職大学院東京サテライトラウンドテーブル 2024「主体的な学びが目覚めるとき～未来を切りひらく学び不それを生み出すコミュニティ～」とし行われた。私は、これまでの取組を振り返り、今後の学校改革に向けて考える機会となった。

■松木健一氏「inclusive 教育を考える」

松本先生から「まず魔法にかかるとを試してみませんか」の問から始まった。自分は、「魔法にかかると???」と少し混乱しながら拝聴した。

障碍とは、相互障碍状況と相互輔生の話の中で、お互いのコミュニケーションが成り立たない状況が障碍になっている。相互輔生することによってコミュニケーションが成り立つとの話があった。何より先生自身が障碍を抱えているとの言葉には、共感した。自分自身も相互障碍状況に気づかず子供たちに対応していたことに気付かれせた。こちらは、正しい指導と思って生徒と関わるが、伝わらない、行動変容にならないことが多くあった。相互障碍状況を踏まえて対応していれば、行動変容にもっとつながったのかと考える。そして、相互障碍状況であることに気付き、子供の立場に立って、相互輔生していくことが大切だということを学ぶことができた。

「子供は見るが子供たちの世界を見ているのか」の問には、子供たちの世界まで見ていない自分がいたことに気付いた。だからこそ子供たちと一緒に学んでいくことが大事であることを改めて考えさせられた。

■実践報告

報告①「年少児保育におけるプロジェクト保育—探究と協働の始まりを考える—」

さくら認定こども園 園長 伊藤 康弘 氏

報告②「東大附属で6年間『探究学習カリキュラム』を受け、そこから10年経った今。果たして私は『探究』出来ているのか」

株式会社コナミデジタルエンタテインメント
作曲家（リードコンポーザー） 中島 直樹 氏

報告③「主体的に学ぶ姿になるために ～地域と連携・協働した探究的な学び『おがわ学』の実践から～」

埼玉県立小川高等学校 教頭 岡本 敏明

実践報告から考えたことは、他者との関わりから人は成長していくということを実感した。幼稚園児も高校生も人と対話し、協働することで変容していく。自分が実践報告した「おがわ学」の取組でも高校生が学校に閉じるのではなく、地域の方々との関わ

りの中で成長している。学校の中での成長よりも数段早いスピードで変わっていくのだと感じている。

さくら認定こども園の伊藤園長から心理的安全性がパフォーマンスを向上させるとの話があり、すごく共感した。株式会社コナミデジタルエンタテインメント中島直樹さんから「学校の文化は生徒を強くする」との話があった。学校の文化をどのように創っていくのかを改めて考えさせられた。

そして、子供たちの学びの場がチャレンジする場になるためには、心理的安全性が必要不可欠なのだと改めて感じた。

■ラウンドテーブル

若手の先生が正解を求めすぎている。正解のないものや見通しのつかないものへの不安感を持っている。間違ふことにショックを受けてしまう教員もいるとの話があった。若手教員の不安感を取り除き、自己肯定感を上げていくためにはどのようにすればよいのだろうか。段階的に壁を乗り越える支援を一緒にしていくことが管理職に求められているのではないかと感じた。自分は、管理職として若手教員と一緒に壁を乗り越えているだろうか、若手教員にとって一緒に壁を乗り越えてくれる教員の選択肢になっているだろうかと考えてしまった。

■最後に

東京ラウンドテーブルは、院生を中心に取り組んだ。自分がどのぐらい貢献できたかはわからないが、福島先生を始め福井大学連合教職大学院の先生方にこのような機会を創って頂き感謝申し上げます。

この機会はコミュニティをとおしての学びの場であり、成長の機会だった。そして、学んだことの実践の場であったと考えている。この経験を学校現場でどのように活かしていくのかを試されているように感じている。

今後、勤務校の学校改革に向けて、新たな動きが進み始めている。この学びを活かして、生徒、教員が活きる学校づくりに取り組んでいきたい。

気づきを行動に変えて

学校改革マネジメントコース2年/福井県立科学技術高等学校 前川 博靖

一般行政への派遣をきっかけに、高校での14年間の教員生活を終えた時点で小学校への異動を希望しました。その理由は、小中高12年間の子どもたちの学びをみてみたいという想いからであり、連合教職大学院で小中高連携（一貫）について考える動機にも繋がっています。4月からの月間合同カンファレンスや集中講座では、私自身のこれまでの実践を語り、他の先生方の実践に耳を傾けてきました。話し手の方の熱量や行動力・実践力、そして、学び続けようとする人間性に毎回触れることが自分の活力になっていることは言うまでもありません。だからこそ、11月の合同カンファレンスのテーマである「他校の実践から学び、他校の研究を支える」について一歩踏み込んで考えるために、坂井市立丸岡南中学校の公開授業に参加させていただきました。

どの教科においても系統的指導は大切ですが、数学という教科は特にその意味合いが強い教科の一つだと感じています。本校に入学してくる生徒も数学に対して苦手感が強く、関数分野はその一つです。グラフのかき方、式とグラフの関係性などを復習しながら学習を進めてはいるものの定着しているとはいえない状況であること、分野内の單元ごとの繋がりを感しながら学習を進められている生徒が少ないことが本校の現状です。これらを改善するためにも、中学校でどのように授業が展開されているのか、中学生のつまづきはどこにあるのかを考えながら授業を参観することで見えてくるものがたくさんありました。長期実践報告書を読む際やカンファレンスの中で大切にされている話し手の視点に寄り添うことを実践するためにも、こういった機会にどんどん飛び込んでいくことの重要性にも改めに気付かされた瞬間でした。また、公開授業後の研究協議会にも参加させていただき、校区内の小中の先生方と意見交換する貴重な機会を得ることができました。小学校で

の学びが中学校での学びにどのように繋がっているのかを双方の視点から確認する良い機会であることは勿論、私のグループではそれが高校での指導にどのように繋がるのかについて話し合うことができました。例えば、今回のような公開授業では、理解度の高い一部の生徒の一方的な説明に終始することが多い中、授業展開の中で短い時間でも自分で考える時間を設定したり、自分の考えやすい手法を選択して課題に取り組みせたりしていました。授業の中でICT機器を使用することについて戸惑っている生徒もほとんどいませんでした。新学習指導要領の実施に伴って、授業づくりが生徒の個別最適な学びの方向へシフトしているため、学び方を定期的に確認し合いより良い方向へと舵取りすることはとても重要です。だからこそ、私自身が今まで以上に校種の垣根を超えた系統的指導について考え協働する機会を創り出すことを目指していきたいです。

今月のカンファレンスのまとめとして、長期実践を報告する意味について再度考えてみました。私の場合はこれまで自分が行ってきた実践の単なる報告になっているだけで、その実践を省察しマネジメントの視点から再度捉え直す作業が足りていないと思うようになりました。また、これから検討されていく学習指導要領では、系統性に加え拡張性がキーワードとなることを木村先生にご教示いただく機会にも恵まれました。高校の教員としては、学校での学びが社会の中でどのように拡張していくのかを意識する必要があり、その点について教科や生徒指導など、幾つもの側面から評価していくことが求められますし、木村先生が長期実践報告書の作成に関して何度も使われていたレイヤー（厚み）をだしていくためには、その時々で行う省察が重要になっていきます。その点を意識しながら、自身の長期実践報告書の作成を少しずつ進めていきたいと思います。



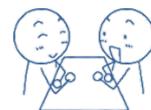
お知らせ

Schedule

12/25 Wed. - 27 Fri.	冬期集中講座 a
12/28 Sat.	予備日
1/5 Sun. - 7 Tue.	冬期集中講座 b
1/11 Sat.	予備日
1/31 Fri.	長期実践研究報告締切
2/2 Sun.	長期実践研究報告会 9:30-12:30
2/8 Sat.	第1回入試
2/22 Sat. - 23 Sun.	ラウンドテーブル
3/1 Sat.	第2回入試
3/13 Thu.	運営協議会(オンライン)
3/24 Mon.	学位記授与式 学位記伝達式 18:00-20:00



Newsletter は、教職大学院に関わる皆様の協力で作られています。
修了生の皆様もご自身の実践や近況について投稿してみませんか。
関心がある方は、dpdtfukui_n1@yahoo.co.jp までご連絡ください。



【編集後記】

初年度の院生さんはこの1年の自分自身や回りの変化などに書いてくださっています。修了年度の皆さんは、この2(3)年間の学びだけでなく、ご自身の長い実践そのものの振り返りについて語られていたことが印象的でした。月間カンファレンスも11月で最終。今後は冬期集中、長期実践報告会、ラウンドテーブル、そして学位記伝達式とまとめの時期に入っていきます。慌ただしさもありますが、丁寧に毎日をご過ごしていきたいものですね。(H.T.)

教職大学院 Newsletter **No.189**

2025.01.19 公開版発行

編集・発行・印刷
福井大学大学院 福井大学・
岐阜聖徳学園大学・富山国際大学
連合教職開発研究科
教職大学院 Newsletter 編集委員会
〒910-8507 福井市文京 3-9-1
dpdtfukui@yahoo.co.jp